

や。我儕は唯だ知る神の小息なき遊戯欲もしくは藝術欲（戯曲心）は同時に其の最も莊嚴眞實なる事業慾たるを、神にありては遊戯やがて經綸なり、經綸やがて遊戯なり。かるが故に神は天地萬有を其の觀念と思ひ浮かべて、超然として美的に之れを靜觀するのこゝろ充ち足らへると同時に、路のべの葉末の露の一半の心をだに圓かに養ひ長て息まず。神は觀念をもて萬有を照らし、愛をもて之れを養ふ。否、神の觀念に照らされ、神の愛に養はるゝとを外にして、天地萬有の實在なるものあるべしや。萬有は神の觀念と愛とを離れては在らじ、神の觀念と愛とその者やがて天地萬有なり。思へ、軟かなる苔衣の中に包まれたる醜き頭なる巖の一塊だに、尙ほ是れ神の觀念及び愛の結びなした

る心靈的實在の一分身にはあらずか。如何なる難透の物質塊といふとも、觀じ來たれば、究竟皆神の觀念之愛の一波なり、一浪なり。觀念ならぬ何物かある、愛ならぬ何物かある。何物か觀念及び愛より成れる神の大いなる埧の中カマに碎けて融けて流れざる。眞に天地萬有を觀ずる者には萬有は直ちに觀念と流れ、愛と燃ゆ。復た我等が居常謂ふ所の堅き入り込みがたき物てふ者はあらざる也。而して是れ取りも直さず宗教的光耀の意識の與り得る一神秘的眞理にはあらずや。宗教的光耀の意識に現する世界の一特相は、觀念之愛の世界也、愛之觀念の世界也。

是くの如き光耀の意識に躋りて、我等は始めて神秘なる大生命の内容に分け入り、所謂本地の風光に觸れたる心あ

り、是くの如きは平生尋常の意識以上に、高大深奥なる意識的天地を開拓せるものにあらずや。この光耀の意識に立つて復び尋常聞睹の境を瞰みるらんか、一切は影と漂ひ、幻と浮かぶ。

一たび此の光耀の意識を経て、自然に向はむか、自然は復た昨の「自然」にあらず。流るゝ如き「自然」の瀟かき氣は我が眼にも、耳にも、心にも充ち満ちて、其の光榮ある意義は温かに我れを包み來たる。「自然」はもはや我れと駢び立つ獨立の實在にはあらで、同じ意に聯つなる一心靈の姿也、有情の友也、同胞也。まして同じ貴き魂の枝につらなる我等人類をや。かくして眞に「自然」及び人生を讀むの眼を得たりといふ、非なる耶。

古の哲人はいひぬ、吾人の觀念は神の觀念を分有して在り、吾人の萬有を見るは神の觀念を媒して見るなりと。さはあれ、吾人は屢々何等此くの如き概念知を藉ることなくして、謂はば、端的に之れと同じ内容の眞理に悟入するとあり。此の直覺の一刹那、吾人は天地萬有に神意識の森然遍在して到らぬ限なきを感ず、吾れの神と俱に、神と同時に、萬有を見つゝあるとを感ず、吾が眼の神の眼と相即して萬有に打開けたるとを感ず、吾が視聽の二重の視聽なるとを感ず。是れ亦少なくとも我等が宗教的意識の眞實なる一片にあらずや。

上に述べたる如き宗教上の光耀若しくは見性の意識は、必ずしも或一定の宗教的脩養を経たるものならざるも、尙

ほ能く之れに參し得ざるにはあらず。何人も詩人テニソンが宗教上一種の光耀の意識を有したるを聞かば、之れを太奇とすべし、而かも彼れが此くの如き經驗を有したるは事實なり、彼れ曾てその友に書き送りて曰はく、

予は魔睡的無覺の狀態に於いて、曾て一たびも啓示を得たるとなし、されど一種覺醒之失神 (A kind of waking trance) (外に適當の言葉なければ此くは名づけつ) は幼時より獨居の折、予の屢々經驗せる所なり。其の法は、自ら我が名を繰り返し、く、て默誦三昧するにあり、此くして休まざるうち、個人意識は突然消え失せて、個人そのものが無邊の存在に解躰し、還沒し去れるが如くなるに至るなり、而してこの狀態は混雜なる狀態

にあらずして、極めて明晰に、極めて確實なるうちの極めて確實なる、而かも言語に絶したる狀態也、こゝにては死は幾んど笑ふべき不可能事たり、人格の失亡(若しこれが人格の失亡ならば)は何等の滅亡とも見え、ずして、唯だ眞生命とぞ見えぬ。予は予の記述のたどたどしきを耻づ。是れ全然言説に絶したる狀態なり、云々。(ヂェームス著「宗教的經驗の種々相」三八四頁)

と。今試みに此の一節を禪家が悟の意識を形容せる語に翻へさんか、其の自己の名を反覆默誦する一種の方法は、恰も禪家が己が呼吸を靜かに數へ、く、て一念の凝寂を謀る數息觀などの工夫と似たらずや、其の個人意識の突然の消失を言へるは、禪家が無我といひ、身心脱落といひ、坐脱立亡

など言ふと同じ意ならずや、其の意識状態の混雑せずして極めて明瞭確實なるを言へるは、是れ禪家が悟の意識を、胡來たれば胡現じ、漢來たれば漢現するなる、慍々澄徹の寶鏡三昧に譬へたると同じからずや、其の言語に絶すといへるは、是れ言語道斷、心行所滅の義にあらずや、其の個人格の失亡が即て眞生命なるを言へるは、是れ取りも直さず禪家が見性といひ、本來の面目といひ、本地の風光などいふ消息ならずや。是の如くに比較し來たれば、件の一節に見はれたる宗教上光耀の意識と、禪家の悟の意識とは、正さしく左右源に逢ふものにあらずや、同じ觸發の意識を言ひ現はせるものにあらずや。されば或異様なる文字言詮を外にして直ちに其の眞相に見到らば、禪家の悟といふもの、決して寄

り近づきがたき詭怪の事を弄ぶものにあらず。宗教的素養神祕的傾向を有するものが、是の如き光耀的意識の一角に躋らんは、不可能の事にあらざる也。其は極めて眞實なる意識上の事實なり。

如何にして其の眞實なる意識上の事實たるを證し得べきか。思ふに一切の眞理は、究竟すれば、自悟自照に歸すべし、殊に宗教上の眞理に於いては、意識の直接の自證を即て其の一切なる。冷暖自知の境、豈他の一指をだに容れんや。然らば宗教上の眞理は、單に個人主觀の眞理たるに止まりて、之れを遍通客觀の眞理となすを得ざる乎。之れを科學上、哲學上の言葉に翻へして説くとを得ざる乎。若し其の具象神祕の意義を説くとを得ずとするも、其の抽象通

有の相をだに客觀的に説くとを得ざる乎、若し之れを説くとを得とすれば、謂ふ所の神とは何ぞ、かみこころ神心とは何ぞ、神人の感應道交とは何ぞ、光耀とは何ぞ、見性とは何ぞ。凡そ此等の宗教上の事實若しくは真理と稱するものに、如何程の學理的、客觀的根據はあるぞ。此等の疑問に答ふるは、宗教哲學上極めて趣味深きとなれども、此かる哲學的解答を提出するは本文の旨趣にあらず。こゝには科學上哲學上の解説如何に拘らず、唯だ意識上疑ふべからざる確實なる事實として宗教上光耀の一内容を展開せるを以て足れりとせん。但だこゝに姑く學理上の論證を外にして、上舉光耀の意識の客觀的確實を證するの道ありとせば、予は之れを吾人日常の實際生活の經驗其のものに訴へて説かん乎。何

をか實際生活の經驗に依れる證明とはいふ。

予は曾て自ら經たりし宗教上の光耀なるもの、そは固より尙ほ淺きものにしあれど、或は予一個の主觀の迷ひ、若しくは夢幻しにもひとしきわが面白の空想にはあらじかと、心屢々打惑ひたるとあり。かくて後予は竟に其の決してかゝる迷妄空想の類ひならざるとを日常生活の經驗によりて證明するとを得たり。光耀の意識は、我が日常生活の經驗と毫しも矛盾する所なきのみならず、寧ろ反りて之れを統一して、之れに一段深き意義を帶ばしむるものなるとを見たり。其は吾が他のすべての心生活の要素の根柢となりて、多く之れを發展せしむるの力なるとを見たり。其の深遠なる悦びは、世の常のうつろひ易き徒なる悦びと

異なるを見たり。此くて此の真理の他の真理に抹せられず傷けられずして、反りて之れを活如たらしむる極めて眞實のものなるを見たり。其が懐ひ出は實に吾が心靈の糧なり、生命也。主觀的空想又迷妄にして是くの如くなるを得べしや。ヂェームス上記の書中、某氏自傳の一節を録したる意に云はく、

精神的な生活は、此かる生活を経たる人々にはのみ其を證明す。されど其を理解せざる人々に對つては吾人何とか言はむや。吾人は少なくとも言ふを得べし、この精神的な生活の経験は、之れを経たるものには眞實と證せらるゝ者なりと。そはこの経験は客觀的實生活に接觸するの時、依然として變動するとなければ也。夢

ならばこの試練に堪ふる能はず、吾人夢より覺むるや、直ちに其の夢なるを知る。疲憊せる腦裡の空想、亦この試練に堪ふる能はず。予が神の現前につきて有したる最高の経験は、稀有にして且つ短時間なりき——愕いて神^{○○○○}に在りと叫ばざるを得ざる程の意識の閃き——若しくはさばかりは烈しからず、唯だ次第に消えゆく、高擧及び直觀の状態なりき。予はいと嚴密に是等刹那の意識の價値を疑ひ質せり。予は吾が一生の事業を、かゝる腦裡一片の空想の上に築きつゝあるに非ざるかを恐れて、何人にもこの事を打明けざりき。さはれ有らゆる疑問と試験との後に、今は此等の経験が、予の生活の最も眞實なる経験として、及び過去

一切の経験と過去一切の進歩とを説明し是認し統一する経験として、證據立てられたるを發見せり。げに此等宗教上の経験の眞實なると、其の深遠なる意義とは、不斷に一層確實に自明的のものとなりつゝある也。此等の経験を受用せる刹那にこそ、予は最も充實せる、最も強き、最も健かなる、最も深き生活を経たりしか、云々。(同書三九七頁)

是れ不思議にも予が言はむとする一面の経験を、ほゞ限なく道ひ得たる者にあらずや。宗教的光耀の意識は、少くとも實際生活の試練に堪へ得て、其の客觀的確實性を護り得たる者とやいはまし。光耀の経験は、夢にあらず、空想にあらず、最も眞實なる経験也、最も深奥なる眞理也。

(明治三十七年九月)

~~mad~~ madman
 madman
 madman

病問録

知己

何人も他に知られたしの念あり。千萬人の徒なる喝采に動かざるものも、尙ほ其の一人の友に知られんとを求め、一代の盛譽をあなかまと聞きすつるものも、尙ほ知己を千載の後に期す、人は己れを知るものなき生活に堪ふる能はず。曠野を家とし、岩洞を居とし、世を無きものと住みわぶる窟欲枯禪の徒も、尙ほ中心いづこにか知己を求むる聲あり。人に知られんとを求めざるものも、尙ほ吾れと同じ心持てらん何物にか知られんとを求むる、是れ實に人の社會

的性情の自然の發動にあらずや。

他に知られんとを求むといふ、而かも吾人は人の私心私情に知られんことを願はず、其の朗かなる公明の心に知られんとを願ふ。こゝに訴ふるものは、他の個人意識にあらずして、遍通意識也、主觀意識にあらずして客觀意識也。かくして吾人が他に知らるゝを求むる心の、眞實なればなるほど、其の知己たるべき人の標準を高うし醇化し、竟に其の一切の徒なる、うつろひ易く、搖き易き一時性、偶然性を抽き盡くして、之れを常恒不易、正確無謬の人となす。されば人に知らるゝを求むる心は、之れを究竟すれば、やがて神に知らるゝを求むる心にあらずや。極めて實際氣質なりし孔子だに、知己を人以上の境に求めて、知我者其天乎と言へり

吾人は神に何を知られんとを願ふ乎。吾が價値也、真情也、眞要求也。吾が價値に對する自信あり、吾が眞要求に對する自覺ありて、吾が心始めて神に嚮往す。神に知られんとを願ふものは、先づ吾れに神に知らるゝ要求、自信無かるべからず、神を呼び求むるものは、先づ吾れに神を呼び求むる權威無かるべからず。吾れに抑遏すべからざる旺盛なる要求若しくは自信ありて、則ち神を仰ぐの一念切也。

吾れ自ら吾が價値、要求を自覺、自信す、この自覺と自信とありて、尙ほ何爲れぞ神に知られんことを願ふぞ。答へて曰はく、吾が價値、要求の自覺、自信といふものは、是れ吾が私心に媚びて得たる浮誇矜驕の沙汰にあらずして、吾が心の客觀的、遍通的方面に訴へたる意識、一言すれば、吾が心之天に

知られたるの意識也。眞の自信は、畢竟ずれば、吾れ自ら吾が心之天に知られたるの意識にあらずや。何人か吾が心之天を敬せざる、何人か吾が心之天に知らるゝことに、至高の満足、窮極の安心を見出でざる。絶對的懷疑白眼の徒は言はず、苟くも嚴肅なる一念を以て、人生を觀じ、其の眞摯なる努力を泡沫の夢となさざる限り、何人か暗々の裡、吾が心之天に眞認識、眞評價の知己を求めて、こゝに究竟の安立を托せんとはせざる。自家妍媸、自家知。而して吾が心之天に訴ふる心ぞ是れ取りも直さず神に知らるゝを願ふの心なる。神に知られんと願ふ心は、吾が心之天に知られんと願ふ心と同じ心の根柢より咲き出でて、其の一層調べ高く光強く震動煥發せる者にあらずや。自己の價値及び要求

に對する眞自覺と神に知られたる心とは所詮離れたるものにあらず。一は主觀に隨し、他は客觀に溢れたる也。古人が浩然天地の間に塞がると言ひしは、此の主觀信の客觀信に溢れたる心也。彼のウォームスの大會に無前の自信を發揮して「神吾れを祐けよ」と叫びたる健兒の聲を聽かずや。大なる自信は神に之く。されば又孔子が知己を一種の靈智ある天に求めたるも、一直に支那三代の因襲的信仰の片影とのみ見るべからず、少なくとも彼れが之れを發したる刹那には、寧ろ其の盛大なる道德的自信の、客觀的に發展し煥發せるものと謂ふべき也。

價 値

價値は之れを評價する自覺と、相錯り相待つ。一切の價値は、之れに價値を附し、之れを價値ありとする自覺者の在るありて、始めて之れを言ふを得べし。若し人生に眞善美の實在するを許るさば、同時に復た眞善美その者の價値の、評價者、自覺者あるをも許るさざる可らず。されど謂ふ所の自覺者を以て、個人覺のみとは見る可らず。個人覺には生滅あり、而して眞善美には生滅あらざれば也。天地の破壊、人類の滅亡と共に、個人覺の全く地上に跡を絶つ時ありとも、眞善美は尙ほ永へに其の光輝ある實在をいづこにか有すと思はざるを得ざれば也。吾人は一切の個人覺を考へ去るを得べし、無きものとするを得べし。竟に眞善美の理想組織そのものを考へ去る能はず、拂拭し去る能はず、無

きものとする能はず。眞善美は吾が一心の所産にあらず、吾れは之れを左右する能はず、むしろ吾れは其の客観的權威に左右せらる。眞善美の來たるや、吾人は時として、唯々之れを打仰いて個人覺に受け納るゝ外なきが如き觀をなす。この消極的納受の一種微妙なる機關を有するものは、是れ特に天才と稱せらるゝ者にあらずや。驚くべきかな眞善美の現前。誰れか能く其の深秘なる來路を釋ね窮むる。吾れ眞善美を作ると言はむか、吾れ實に之れを作りぬと惟へる刹那にも、尙ほ吾れは外より與へられたる則に従へることを意識す、意識せざる能はず、吾が自ら新たに踏み固めたりと思ふ道は、是れ既に太初より坦々として走れる大道にあらずや。されば眞善美は外より來たつて吾れを縛す

と言はむか、極めて然らず、其は寧ろ來たつて、吾れを釋放し、吾れを自由にす。吾れの其の姿、其の聲に於けるや、宛も懐かしき古里の月を觀、古里の物語を聽く思ひあり。かくばかり吾れに親しくして、而かもかくばかり吾が個人覺の力に須つこと少なき眞善美は、そもく何物の力に須つて能く自ら[、]在[、]り[、]と[、]するの客観的權威を有するぞ。若し、吾人個人覺を超越し、若しくは其の根柢に深處遍在する大覺の在るにあらずば、人生に唯一の意義を附する眞善美の實在は、要するに個人の主觀の、空華幻影に過ぎざるべし。天地に遍滿せる大覺の、其の根柢となるとなくして、眞善美は能くその實在を保ち得る乎。眞善美若し、個人覺の生滅を越すとせば、吾人は須く謙讓敬畏の心を以て其の實在の根據を

大自覺者に歸すべき也。眞善美は單なる主觀の理想にあらず、眞善美は人生の中空に淡く浮かべる虹霓にあらずして、堅く、旺んに燃えのぼる不盡の太陽也。眞善美の光明を慕ふものは、又その由つて發し來たる太源の大自覺者に渴仰の思を馳せざるを得ず。眞善美の爲めに戦ふは神の爲めに戦ふ也。

理性

宗教上の信仰が感情分内の事にして理性と相渉らざるは少しく實驗あるものの否まざる所なるべし。宗教は神祕なる個人の感情に根ざせる事實なり、言説すべからず、分析すべからず、概念組織に構成すべからず、猶ほ感覺てふ具

象的事實の、竟に理知の分析説明を容るさざるが如し。然らば宗教の信仰は全く理性と相渉らざる獨立の者なる乎。世の多くの宗教家は、是くの如き見に住して、信仰を全く理性の權能以外に立たしめんとす。信仰果たして全く理性の權能以外に立つものなる乎。之れに答へて然りと言ふものは、是れ畢竟理性を以て論理的若しくは推論的理性と解したるなり。是くの如き理性の職とする所は、唯々既存の事實と事實との關係を辿りて、之れに條理あらしむる也。自家撞著なからしむる也、論理あらしむる也、所謂理窟に合はしむる也。而して事實そのもの理想そのものを立す、の一事は、竟に與らず。理性若し唯だ是くの如き意義職分を有するに止まらんか、其の信仰の究竟相と觸接の點なき、

辯を須たざるなり。信仰の極處が、個人神祕の感情に根ざせる事實なると嚮に言へるが如し。所謂理性の是くの如き事實に面する、唯之れを所與の事實として打仰ぐあるのみ、攝受するあるのみ、其の意義及び價値を理解し、批議し、評價する如きは全く不可能とする所也。誰れか美意識の究竟相に是くの如き理性の力與れりといふ。誰れか宗教的信仰の極處に、是くの如き理性の交渉ありといふ。

されど理性の義これに盡さず。前言の理性は、唯だ特殊なる、而して寧ろ狹隘なる一義の理性を指斥したるに過ぎず。信仰と理性とを睽離すと見るは、要するに是の狹隘なる一義の理性をのみ、眼中に置いて、之れを信仰と對せしむるがゆゑ也。されど若し理性を解して、唯だ之れを論理的

推論的のものとせず、更に之れを以て是くの如き論理推論を行ふの基礎、根據となるべき究竟の原理、若しくは、理想、其者を立する一性能と見做さんか、此には信仰對理性の關係は新たなる面目を著け來たる。この一義の理性、是れ吾人全人の理想を與ふる立法的、統一的、直覺的理性にあらずや。この一義の理性、是れ唯だ吾人の心の知力的方面のみならず、更に意志感情の要素の大いに與る所ある、一言すれば、深く吾人全人の要求に根ざせる所ある理性にあらずや。而して又この一義の理性、是れ取りも直さず前解狹義の理性と並びて、古來慣用せらるゝ所にあらずや。

信仰の究竟相は、毫も理性の力に須たずとは一の理性に即いては言ひ得べし、他の理性に即いては言ふべからず。

夫れ信仰は全人の理想と調和して、始めて充實すべし。信仰の煥發するや、全人格の根柢よりす。信仰若し全人の理想と調和を缺き、若しくは中に人格の二元的分裂を藏せんか、忽ち無限の空虚を生ずべし、光なく、力なく、萎靡枯槁、能く信仰として存立するなかるべし。而して是くの如き全人の究竟理想を吾人に附與するもの、謂ふ所の直覺的理性に外ならずとせば、信仰亦竟に理性の權威の下に立つことを否むべからざる也。何人か有意又無意に、自家信仰の窮極の理由根柢を此の意義の理性に訴へざる。之れに訴ふる所なしと言ふは、是れ自ら欺けるのみ。信仰若し此の理性の直覺に參する所なからんか、其の全人に占むる一要素としての正常なる位置を失ふべく、其の活潑なる全人的交渉、

はた此に杜絶すべし。信仰その者の吾人の全性情に占むべき不動の位置を指示するもの、即て理性究竟の直覺を措きてあらざれば也。何物か信仰を信仰そのものとして存立せしむる、理性の究竟の直覺のみ、其の直覺の掲ぐる理想のみ。直覺的理性は能く全人の理想を掲げ來たりて、吾人一切の要求に個々正常なる意義と價值とを附して、互ひに相調和統一する所あらしむ。理性は是れ至高の法庭にあらずや。信仰亦實にこの至高の法庭に參して、自家存立の權利を要請する外はあらず。

若し古人と共に「不條理なるが故に信ず」と言はむか、其の謂ふ不條理なるが故に信ずることの窮極の理由もしくは根據を與ふるもの、是れ亦竟に右いふ理性の力にあらずや。

若し又信仰は理性(狭義の)を超すと見て、之れを理性以外の境に護らむか、此く信仰を理性(狭義の)の畛域より別かちながら、尙ほ其の相当なる存在権に是認の印を捺するもの、是れ亦竟に右いふ理性の評価指導に須つにあらずや。謂ふ所理性の直覺の内容なるもの、人々萬殊なるべし、而かも何人か竟に能く理性最高の統一的指導以外に立ち得る。頑信迷溺の徒、尙ほ自家分上の理性に自ら是とする究竟の根據を托すべし。感情としての信仰は自家に局する所あり、自家以外に眼を放ち、自他の關係を較して其の全人組織に占むる位置を見定むる如きは其の能くせざる所、而して是れ惟り理性の能くする所にあらずや。狭義の理性は唯だ能く事實と事實との間の論理上の關係を定むるを得、而か

も能く事實そのもの(信仰原理理想)を立すると共に、其の事實相互の間の價值上の位置、有極的意義を規定するもの、是れ惟りこゝに謂ふ直覺的理性の権能にあらずや。信仰は不斷に理性の感化を受く。信仰は不斷に理性の大氣を呼吸す。理性の大氣は、人により、時によりて、極めて稀薄なるとあるべし、極めて不透明なるとあるべし、極めて淺陋狹局なることあるべし、而かも猶ほ信仰はこの大氣を呼吸して其の不斷の感化の中に生活せざる能はざる也。

愛

擾々たる人の世を眼下に瞰て、無限に高く獨立軒舉する、是れ吾が一の願也。一杯の水をだに、熱き心をこめて、世の

現
 衰れなる同胞に頼ち與ふる、是れ吾が他の願也。曠達と
 細心と、白眼と熱誠と、是れ吾が兩つながら獲むと欲する所
 也。吾れは無限に我を擴大すると共に、無限に我を縮少し、
 無限に我を肯定確立すると共に、無限に我を否定拋擲せん
 ことを願ふ。自家實~~現~~を理想とする希臘意識と、克己獻身
 を理想とする基督教意識と、共に攝めて吾が一心の有とせ
 んと、是れ吾が本願にあらずや。何ものか能く此の矛盾を
 結ぶ縁しの絲たる。吾れ之れを暗黙の淵に索めて獲ず、之
 れを深祕の海に尋ねて會はず、吾れ之れを索めて竟に愛の
 姿にその面影を得たり。窃かに惟ふに、愛こそは獨りこの
 名を負ふに堪へたれ。夫れ愛人愛神は、廣く一切の矛盾を
 藏めて、深く之れを一樹の根柢に培ふ。我を殺してやがて

活かすものは愛にあらずや。我を棄ててやがて獲るもの
 は愛にあらずや。我を卑うしてやがて高うするものは愛
 にあらずや。愛は人生に於いて最も廣き波紋を描くと共に、
 又最も深く其の水心を點破す、又譬ふれば、愛は猶ほ高く
 天翔ける雲と、低く下ゆく水と、末の姿を隔てながら、心一つ
 に澄み通へるが如き乎。古の神人が、一氣高く天地の實在
 に迫りて、吾父の意識に躋れると共に、卑く身を世の無告者
 の間に下だして、其の罪障に涙を灑ぎ、其の弟子の足をさへ
 躬づから洗へる、是れ豈愛の大統一力にあらずや。愛を外
 にして、かゝる莊嚴なる矛盾を結ぶもの、復たあるべしや。
 人ありて、愛は無私ならざるべからず、全く己れを獻ぐる
 純愛ならざるべからず、若し愛そのものに依りて得る心の

喜びをだに一毫計較の中にまじへなば、純愛の全徳既に玷けたるもの也と言はむ乎。されど誰れか是くの如き純乎たる無私愛が吾人の性情に最高満足を與ふる事實を否むものぞ。而して又誰れか愛に頼まれたる如是甚深の悦びを獲むとは願はざる。己れを献ぐるは愛の一面のみ。愛は己れを献ぐると共に、復た己れを獲。吾人は吾が全熱愛を鍾むる者の中に、眞生命を見出だし得べきにあらずや。死之術と共に、生之術を併せ教ふるものは愛也。愛ばかり己れを遠く抛ち去つて復び邇く己れに還らしむものはあらず。無我と我と、無限に袂を分かちながら、左右頭々原に逢ふ者、是れ愛に非ずや。法律の蹄係は膚寸の我を捕らふるのみ、良心の聲は我を憐ましき二元に剖く。それ唯だ愛

乎、我に迫らず、我を剖かず、衷より密かに我を煦め養うて、潤澤の一氣、渾然徹せざる所なからしむ。愛は外より法を掲げずして、中より自づから之れを成就す。愛に依りて己れを捐つるは、是れ中心喜びて己れを捐つる也。而して中心喜びて己れを捐つる、是れ眞に己れを獲るものにあらずや。義務に依りて己れを捐つるものには未だ中心の喜びあらず。其の喜びには一味の空虚あり、凝滯あり、深からず、周からず、最も富贖なる生命は、吾人之れを義務に於いて見ずして、愛に於いて見る也。

數多の慘烈なる人生の矛盾に、最も深く且つ豊富なる總合點を與ふるものは、夫れ唯だ愛乎。眞に愛の意を描くものは、是れ髣髴天地の至高者を描くものと謂ふべき也。

眞理と人生

理を究めて析髮の微に至るとも、其の事若し人生の要求
又は理想と渉る所なくば、其は未だ眞理といふ光輝ある名
稱を享くるに堪へじ。眞理とは何ぞやと言はば、吾人は到
底其が吾人の生活理想に關係するの意義を以て之れに答
へざるべからず。生活理想と風馬牛なる眞理は眞理にあ
らず。如何ばかり抽象的なる、形式的なる、一見人生と無關
係なる如き知識といふとも、或人が「一塊の麵麩をだに焼く
に足らず」と譏りたる彼の哲學的知識といふとも、尙ほ其の
眞理と稱へらるゝ所以は、其が人生と離るべからざる活關
係を有するが故にあらずや。設令ひ其は直接に或實利實

績を擧げずとも、尙ほ吾人の知識的、心靈的生活を豊腴潤澤ならしめ、以て能く人生全體の理想の一要素となるが故に
あらずや。真理といふ語既に一種の價值意識を含めり。
吾人が真理といふ語を打聞いて一種快美（スフィートネス）の感
を以て撲たるゝ所ある、是れ真理の語其のものに吾人の
理想と觸れ來たる或意義を含めるが故にあらずや。人生
の理想組織の一鎖として評價せられざる真理は、滋味なき
光彩なき否全く意義なき空語也。若し一意真理を窮めて、
真理の人生的、有極的意義に想ひ到らず、限りなき繁碎（コンクリート）
の研究堆裏に埋頭して、無邊の實在の一隅に索居するもの
あらんか、是くの如きは眞の學究者の面目にあらず。専攻
の細は厭はず、分科の密は喜ぶべし、但だ一面常に其の研究

をして人生目的の有極に會せしむるを要す。蟻の一股も
解くべし、蜂の一節も剖かつべし、唯だ其の學理刀の向ふ所
をして人生的意義と離れざらしむるを要す。一切の格物
致知、唯だこの用意と相須つて人生と接し來たる。然らず
んば天上の星を讀み盡くし、海邊の砂を數へ了ふとも何の
詮かあるべき。真理は人生の理想の最も高上なる一内容
也。真理を戀ふるは是れ人生の理想を戀ふる也。

真理を真理其のもの爲めに求めよと主張せんは、必ず
しも上論の旨趣と背くものにあらず。真理を真理そのも
の爲めに追求する、是れやがて真理をして眞に深く廣く
人生と觸接せしむるの道にあらずや。かの一向（ひたむき）に功利眼
によりてのみ真理を觀じ、眼前の實利實功（モッフィシエン）

シ」を擧ぐるとをのみ真理の用とするは、是れ真理を待つ
の道を知らざるもの、是くの如きは未だ真理の大機大用を
知らざるもの也。真理は固より實理實益の源たるべし。
されど真理を以て唯々便利なる功利的器具觀を倣すは、是
れ特に真理の光輝あり潤澤ある内容の一面を拙き去つて、
之れを淺薄、俗陋、狹隘、貧寒なる形骸と倣し了ふるものに
あらずや。真理之神は美之神と同じく嫉妬の神也。吾人の
之れに奉事する、須く主一無適なるべし、沒關心なるべし、是
くの如くにして真理の神は其の深秘なる幽光を人生の祭
壇に洩らし來たるべく、是くの如くにして其の光輝は以て
吾人の徳を潤し、人格を温め、心靈的生活を豊かにすべく、又
復た是くの如くにして彼の功利といひ實績といふもの、必

然の産物として吾人の有たるべき也。誰れか數々として
真理の功利を言ひ、實益を言ふ。真理の特に貴き所以は、其
が吾人の身を潤ほす光たるが故にあらずや。真理は人格
の光也。真理を求むるものは先づ此の貴き意義に於いて
せよ。「真理の爲めに真理を求めよ」といふは、畢竟この光華
ある人生の理想を求むるに純粹無雜の一念を以てせよと
いふの意にあらずや。若しそれ理想を離れ人生全體の要
求を離れたる真理といふが如きは、抽象の空語のみ。若し
「真理の爲めに真理を」の語を解して、是くの如き抽象義とな
すものあらば、是れ畢竟真理の富贍なる意義を知らずして
其の空名に迷へる徒なるべきのみ。觀じ來たれば、真理も
藝術も、其の究竟の意義に於いては、道德的（最も高上なる意

味に於いての也、又實に道德的なるべき也。真理の研究は知識上の遊戯にあらず。謂ふ所「游於藝」といふとも、一面之れを堂々たる爲學の功夫と联接せしめて、始めて人生的意義あり、内容あり。かの戯作者的文藝觀は、予輩の取らざる所也。真理といひ藝術といふ、所詮人生の至上善に參して、其の全人生系統に占むべき自家特殊の位置及び價値を要請し來たる外はあらざる也。

真理は貴ぶべし、真理を求むるの心は更に貴ぶべし。美はしきものを慕ひあこがるゝ如き一種の真情を以て真理を慕ひ求むるは、如何ばかり貴き事業なるぞ。是くの如き真情を以てして始めて能く真理の奧秘に分け入ることを得べく、又是くの如き人に於いて真理は始めて能く其の貴

き趣味となり、力となり、生命となり、人格となり、品藻となる。真理貴き乎、真理を慕ふの心貴き乎、予輩はレッスンと共に真理其のものよりも真理を求め、くして休まざる心を取らんかな。真理其のものが是くの如く心を操るものに於いて眞個教養(カルチャー)の意味を帯び來たる也。

真理は乾燥なる理窟三昧にあらず。真理には甘美あり、潤徳あり。殊に宗教、道德等の真理は、到底吾人心情の要求若しくは賦彩を離れては其の意義を捉らへ得べくもあらざるなり。世の真理を究むと稱する學者にして、冷やかなる理窟一邊に走せて、絶えて其の溫潤の感化を受用せざるもの多き、是れ彼等が真理の眞意義に涵泳せざるの致す所にあらずや。真理其のものを、高き理想上の趣味として、我

が人格に結びつかしめざるが故にあらずや。真理の追求に對する眼光の、道樂的、學究的なる然らざれば功利的、職業的、器械的、報酬的なる、是れ我邦近時の學風に於ける一弊にあらずや。

明治三十七年十一月

成功の意義と安心立命

世の事業を言ひ、成功を語るもの何ぞ多くして、其の眞意義を解するもの何ぞ少なき。畢竟事業とは何ぞや、成功とは何ぞや。

人目を光照する事業を成就し、物質的なる實利實績を社會に寄與することをのみ果たして事業といひ成功といふべき乎、是くの如きは寧ろ事業といひ成功といふ意義を淺薄、狹隘、貧寒、俗陋ならしむるものにあらずや。湛然深く沈潜して、自家人格の根柢に培ひ、其の心田品藻を涵養する、是れ亦深き貴き意義にての事業にはあらずるか、成功にはあらずるか。

偉いなる事功の貴きと共に、偉いなる事功に向かつて奮進向上する活動其のものは、更に更に貴き事功ならずや、縦令ひ活動向上が何等の較著なる効果を産せずとするも、縦令ひ落々たる雄心浩志を抱いて空しく蓬蒿の中に埋了するが如きことありとも、誰れか之れを目して全く失敗せりとはいふ。之れを失敗せりとするは、是れ畢竟己が狭陋なる功利眼、實益眼を以てのみ成功の意義を解すれば也、事業といひ成功といふ、さしも淺膚なるものならんや。予輩は眞理其のものを貴ぶと共に、レッシングと共に眞理を無限に追求して休まざる研究心其のものを更に貴ぶ、眞理を贏ち得ること、若し貴き事功ならば、眞理の追求に熱するの心、亦是れ貴き事功にあらずや。是くの如くに觀じて事業と

いひ成功といふ意義始めて淺薄ならず。

或は又直接に利民濟生、愛他慈善の事に從ふを斥して事業とし、其を成就する者を成功の人と呼ぶ。されど是れ亦唯だ事功の一面の意義を掲げたるもののみ、自家の徳器を成就する、是れ又事功に非ずして何ぞ、偉いなる社會的事業にあらずして何ぞ、自己を完成する、是れやがて社會の一點一角を完成するものにあらずや。且つ夫れ徳ある所、其の感化は孤ならず、吾が潜徳の幽光、おのづから能く一隣人の心をだに感孚するを得んか、誰れか之れを貴き事功にあらずとはいふ。世の事業を言ひ成功をいふもの、其の洞觀の眼を開いて是くの如き聲なく臭なく沈々として行はるゝ、心靈的事業の偉大なるに見到せざるべからず。且つや利

他といひ兼濟といふ、談豈容易ならんや。他を救はんとするものは、先づ自ら救はざるべからず、先づ深切なる個人的教養の基礎なくして、進々として利他をいひ博愛をいふ、果たして能く其の謂ふ所の事功の目的を達し得べしや、吾人は深く願みてスピノーザ又はゲーテ等が百鍊の自家圓成主義、高個人主義に學ぶところなかるべからざる也。

世の所謂英雄偉人のみが果たして成功の兒なる乎。正直に自己の額に汗して、日常義務の高道を濶歩する幾多無名の英雄、是れ亦成功の兒に非ずや。英雄偉人、及び其の事業にのみ感謝するを、知つて、其の寧ろ基礎たるべき幾多無名の英雄、無名の事功に感謝することを知らざる社會は、少恩刻薄の社會也、自家存立の意義をだに自覺せざる社會

也。人道の爲めに盡くすもの、惟り英雄偉人のみならんや、吾人は寧ろグリーンと共に善良なる隣人及び正直なる市民として理性の高道を歩むことを外にして人道に對する純乎たる熱情はあらじと思ふ。若し赫々たる事功を樹てて社會に寄與する所なきを以て、吾人の一生を失敗なりとすれば、何人か詩人グレイと共に、夕陽墳上に立つて、世の幾多の無名の天才、無名の英雄、無名の美人の爲めに泣かざる、されど是くの如き見解は要するに眼光の局促のみ、吾人は世の所謂英雄偉人たらざるも、尙ほ其の清き、心清と尊き、行爲とを以て天地の實在と連なるを得べく、而してこの一個の自覺の上に不動の安心を託するを得るにあらずや。假^なひ我れは我が事業を以て社會に連なるを得ずとも、我が心

情行爲を以て天地の大系統に連なるを得るにあらずや。天地の一員としては、其處より得來たる一個の人格としては、俗夫野人も學者政治家も、功あるも功なきも、英雄も凡人も凡べて一様平等なる靈魂として取扱はる。此の至高の一境に立たんか、世の所謂偉いなるもの未だ必ずしも偉いならず。嗚呼こゝに我等が解脱の道は開かれたり、此に現實以上の廣大なる光榮の天地あり、こゝに此の世の子等が解し得ざる自由あり、平安あり、慰藉あり、光明あり。

(明治三十八年一月)

人に答ふる書

復啓、御來諭にまかせて左に一二可申述、御參究の一助とも相成り候はばうれしく候。

悟は宗教の一切なりとの御見に對しては、固より異存あるべうも候はず。但だ語りて精しからましかばの婆心を布いて、今少しく申し試み候べし。竊かに自ら信ずる所によれば、天地人生は所詮全く悟り得べきものならず、又悟り去ることを以て満足すべきにもあらずとこそ存じ候へ。我等一面には、一息無間斷の堅信力行を以て、吾が靈之靈に歸依し、頂禮し、祈り、求め、歎き、事へて、その貴き光榮の意義に與らざるべからずと存じ候。小生は悟はどうしても信を

含むべきものかと存じ候。姑く繁瑣なる詮義を外にして
 申し候へば、悟とは通常知的直観の一躍を意味いたし候。
 直観の一躍によりて眞理の三昧に達するは、否むべからざ
 る宗教的實驗なるべく、惟り禪のみに候はず、一切の宗教に
 して如是光耀もしくは頓悟の神祕的實驗を有せざるは無
 かるべく候。獨り謂ふ所の宗教家のみには候はず、神祕的
 傾向を有し候ものは、何人にてても此の光耀の一角に躋るこ
 と、必ずしも難からず、彼の詩人テニンンだに、不思議にも幾
 んど禪家の悟と同様なる一種の神祕的實驗を有し候こと、
 隠れもなき事實に候をや。

げに靈魂の深き淋びしさの中に、限りなき喜びを湛ふる
 は、かゝる神祕的光耀の實驗に候べし。小生は過ぐる静夜、

孤燈の下に筆を執り候折は、つとと思ふ刹那に、筆執りつゝあ
 る我れの、我れにして我れならぬ意識の現前に出て會ひ申
 候、此の刹那筆の動く、墨の紙上を走る、一々超絶的不可思議
 の大事實として眼前に耀きいで候ひき。この間、誠に一瞬
 間に候ひしかど、その一種無類の觸發の意識は到底筆にも
 言葉にも盡くされず候。(本書三六六頁、予が見神の實驗と
 題する一篇参照) かゝる經驗なき貴下には、恐らく之れを
 眞實とは信じ給はざるべし、又或は今の博士先生達たちは、之れ
 を一笑に附し候はむかなれども、是れは小生の舞文にもあ
 らず、空想にもあらず、幻しにあらず、錯覺にあらず、恢誕にあ
 らず、實に小生に取りては我及び天地の存在そのものより
 も尙ほ確實なる事實に候也。願ふ所は尙ほ深くこの光耀

の實驗に游泳し、且つ出來得るだけ明瞭に之れを世の人に傳へたき事に候。

さりながら今申し候如き神祕の一躍は、稀にあるべき光耀の意識に候、必期すべからず、強握すべからず、つまり天竺の聲に候（まかも最も確かなる）。されば我儕が宗教的生活の一面の要求を満足せしむるものは未見の信にありとこそ存じ候へ。即ち向慕なり、歸依なり、信樂なり、力行なり、鍛錬なり、而して是くの如く密々に鍛錬し去つてこそ、謂ふ所の悟も、始めて吾が人格と結びて、其の眞實の力となり候べけれ。信なき悟は何となく河漢に候、空隙あるべく候。悟は信を待ちて堅實なるべく候。我儕は悟らざるべからず、我儕は信ぜざるべからず。悟は信を照らし、信は悟を吾が

眞の實在、眞の所有たらしむ。悟れりといへども、我儕涙あり、この深き涙の意を辿るものは、むしろ信の力に候はずや、げに此の一境、甚深無量、如何なる徹底の悟を以てするも、唯だ其の皮一重を *Babble* する外は候はじ。直観知の一躍といふもの、こゝに至りては至竟亦能く何爲者に候ぞ。嗚呼、悟は貴ぶべし、されど我儕の心情には尙ほ悟以上の要求あるを如何にいたし候べき。近くは我が禪林の大徳、白隱禪師の法語などを御覽候ても、其の悟の游泳自在の趣きより、其の不斷の力行、其の非凡の信力、其の勇猛の正念、其の不退轉の向上、其の焰と燃ゆる脩道三昧の精神に至るまで、彼れが宗教的意識は、唯だ謂ふ所の悟、謂ふ所の直観の意識をのみ以てしては、到底盡くしがたき多くの或物を有し候観有

之候にあらずや。吾れは祈るべき所を知らざれども、聖靈
吾がために言ひがたき歎息を以て祈りぬ」と古人のいへる
全心情の衝動、要求は、所詮、直観知の一躍即ち謂ふところ悟
のみにては満足し得らるまじく候。少なくとも小生に取り
候ては、貴意如何。

次に故近藤燕處子の禪は我流禪にあらずやとの御見、
或は然らむ。小生曾て燕處子と相識らず、唯だ『仰臥三年』其
の他雜誌上に散見せる述作によりて、子が能く沈痾の中に、
湛然、一家見を樹立して、生死の河波猛さが中を嵯峨たるそ
の不動の姿慕はしく存じ候ひし外、何事にも味く候へども、
子の禪の我流禪なりし一事、或は事實に候べし。而して此
の我流禪の一事、適々以て子の證悟の眞實なるを證するも

のには候はじか。やゝ立入りて申し候へば、子の誇りもし
此くの如きもの子にありきとせば、亦或はこゝにありしか
も知れずとこそ存じ候へ。今更申すまでもなく、宗教に於
いては、自悟自證が一切に候。釋迦の如く語り、基督の如く
説くとも、もし自家一點自得の實處なくば、何の詮か候べき。
凡そ慕倣、踏襲の厭棄すべき、宗教より太甚しきはあらず、御
覽候へ、佛教といひ、基督教といふ、皆既に數百年來坦々とし
て踏み慣らされたる禮拜の大道、髮の如く走れるがありて、
加ふるに、入るに法門あり、跪づくに聖壇あり、唄ふべきの讚
美歌あり、祈るべきの禱文あり、經典あり、儀式あり、十字架あ
り、信仰箇條あり、僧あり、牧師ありて、煥乎燦乎、世の靈魂を救
ふ一切の器具備はらずといふことなく、其の便利重寶如何

ばかりに候ぞや。世の滔々たるもの、乃ちこの滑らかなる大道を快馳して、其の門に入り、其の經を誦し、其の禱文を唱へ、其の祭壇に跪づき、而して自ら稱して曰はく、我れはクリスチャンなり、我れは佛弟子なりと。嗚呼宗教もし實に是くの如きものに候はば、宗教畢竟喫茶喫飯事に候のみ。小生は必ずしも是くの如き便利なる形式を詛ふものにては無之、其の道を開き、且つ之れを踏み慣らしたる幾多前人の遺徳を讚するに吝かなるものに候はず、但だ若しこゝに、一個の靈魂の、是くの如き便利なる古來の坦道に傍^モうて走るに満足せずして、別に未踏の荆棘地を斫り開きて、行く／＼自家の新風光を眺めつゝ、無門の關を獨歩して真理の堂奥に分け入る者の候はむか、是くの如きは更に大いに卓然たる者に候はずや。是れなか／＼に其の證悟の眞實なるを語るものには候はずや。吾だに悟の形式、方法のみならず、悟の内容、其のものさへ、人々萬殊なるを宗教的意識の實相なりと致し候はば、是くの如き異流の士こそ、眞に貴ぶべき達者ところ稱すべきには候はずや。若し悟者先覺者と稱するもの、自家悟道の方法、標準をのみ取りて、漫りに是くの如き異彩の士を律するあらむか、是れ寧ろ笑ふべき事に候。今日の宗教界に、一色一様なる抽象クリスチャン、抽象佛教徒の徒らに多くして、獨自一己の異彩ある信念を發揮し候もの、尠なきは、そも／＼宗教界の慶事に候べしや。禪家に印可なるものあり。されど吾が無類特絶 Uniqueなる證悟の内容を印可するもの、吾が自覺を外にして候べしや。

自悟自覺の「然」「否」を外にして、何物の權威か、來たつて是の境に可非の言葉を挿まんとはする。印可といふ、既に業に第二義に墮つ、如是の者、かの異彩ある自覺者に於いて何の眞交渉か候べき。吾れ故燕處子と識らず。されど子が、禪の我流禪なりし一事が、子の悟に何の累を及ぼすべしとも覺え候はず。むしろ形式禪に對する子が態度には、超脱一味の襟懷ありしならむとこそ存じ候へ。小生今は故燕處子が悟の内容等について何事をも語るの資格なく候へば、これは一切他日を期するの外無之、唯だ貴言にちなみて一言此の事にのみ申し及び候。敬具。(明治三十八年一月)

煩悶の人に答ふる書

御書拜誦。貴意十分には解しかね候へども、眞面目なる煩悶の御態度に對しては、滿心の同情をさしげ申候。殊に疑ふらくは、貴下と畧々同様なる經驗を經來たれりと思はしき小生に取りては、貴下が目下の御心狀、人事とも思はれず候。

堪へがたき苦惱と言へるその自覺内容には、曾て小生が「心のたどり」の中に物し候ひしやうなる自己及び一切萬法の存在その者をさへ呪詛せざるを得ざる一種言ひ表はしがたき無類の寂寥、孤獨、心細さ、恐ろしさ等の意識も含まれ居り候や。この大宇宙的とも申すべき廣く、深き、沈痛深刻

なる自覺ばかり、小生を苦惱煩悶せしめたるは無之、泣くに泣かれず、訴ふるに訴ふる所なく、半夜夢さめて、寂寞たる天地の間に無限の孤心を抱きて、如何に腕うできに腕うでき候ひしぞ。されど貴下よ、こゝに一考を要し候は、かく一切を否定し、破壊し、空了し去らんとする一種の自覺そのもののみは、どうしても否定し、破壊し、空了することの出来ぬ權威を有し候一事に候。貴下の所謂光明よりも絶対の闇黒を慕ふその一種深根の涙或は要求そのもののみは、如何に虚無と思ひ去らんとしても思ひ去るとの出来ぬ即ち到底抑壓又は否定し去るとの出来ぬ眞實のものには候はずや、一切を否定し破壊せんとするその根本の苦き涙のみは、竟に否定しがたき偽りならぬ、假そめならぬ最も眞實なる客觀的實在

には候はずや。兄が根本的憧憬のみは拭ひ去ると能はずとやうにのたまへるは、やがて此の意こころにはあらざる乎。而してこの一個の要求的事實こそは、我儕破船せる靈魂が、一所懸命に取継るべき唯一の磐の城にはあらざる乎。兄はこの根本要求の最眞實なる權威ちからを感じ給はざる乎。この根本要求こそは、如何なる批評も破壊も入り込む能はざる堅牢無比の精神的要塞にて候也。どうしても空じ去ることの出来ぬ客觀的權威にて候也。自殺も亦駄目に候。この根本要求は自殺とも無益として嘲り候へば也。否定と破壊とを目的とする自殺も、この要求そのものの存在のみは、之れを微動だにせしむる能はず候。自殺は肉身を空じ去るを得べし、心靈を空じ去る能はず、況んや心靈の根本要

求をや、又況んやこの心の根本要求を積極的に満足せしむるとをや。自殺若し吾人心靈の根本要求を衝き崩して、虚無、無意義に歸せしめ、若しくは満足せしむる力を有し候はんには、小生は疾くに自殺の權威に従ひ候ひしならむ。

そもくこの根本要求(漠然たる無限の寂寞悲哀を含める)は何物ぞと深くく沈潜して御尋究あらまほしく候。自分で自分の自由にならぬこの主觀以上、空想以上、一種不壞の要求、自覺の中に、救済解脱の鑰は窈かに世の始めより置かれたるには候はずや。この一點をのみ力綱ちからづなと、ひしと取継り、不動の信念を以て無間斷に自觀し參究したまへかし。光明やがて湧き出て候べし。其の時の歡喜何を以てか譬へ候べき。冀はくは小生の淺き實驗をも信じ給ひ

て、希望と確信とを以て密々不斷に御觀省有之たく、小生もこの一點一角を最後の踏臺として、戦ひに戦ひて、漸く今の心證に參するを得たるにて候。

「豚の如き安心何爲ものぞ」との御一言、意氣頗る欽すべし。我儕の安心は、如何なる高價を拂ひ候とも、全人全心全靈の要求を満足せしむる底のものなるべく候。然らずんば、寧ろ一生懷疑と寂寞との荒塚あらいづかを友とするかた優り候べし。これむしろ天地に對して忤むぢざる男らしき丈夫の態度には候はずや。草々不悉。

(明治三十八年一月)

心響録

悲哀の秘義

吾人は時として、漠然たれども極めて旺盛なる、朧ろげなれども極めて光輝ある、一種無類の感情に襲はるゝとあり、その來たるや、風の如く、光の如く、無邊際より來たりて無邊際に去る。而かも其の刹那の意識の中には、如何なる知識も、觀念も、想像も、詩も、哲學も、得て言ひ盡くす能はざる豐贖無限の内容を藏する也。そもくこの一種の感情は何物ぞ。吾が過去一切の經驗をして顔色なからしむるこの感情は何物ぞ。そは夢か、夢にあらず、空か、空にあらず。そは

却りて吾等が實在の經驗をして、夢よりも淡く、霧よりも薄からしめんとす。而して吾れはそこに彷彿、全實在の大海原を横絶して現實の岸邊を拍ち來たる大潮音の響きを聞く。

この漠然たる衝動、感情は、やがて限りなき悲哀也。そは實に歎くべき所を知らざる歎きなり。祈るべき所を知らざる祈りなり。而して一たびこの悲哀の自覺に立たん乎、我、我と面相接して、其の間一偽を容れず。見ざる能はず、回避する能はず、掩蔽する能はず、ごまかす能はず。嗚呼我れ如何なれば是くの如き悲哀の運命を荷うて生まれ來たれる、而かも其の最も嚴肅なる事實なるを如何にせんや。悲哀は最も深き我の實相に非ずや。我れ昨は我れの眞實相

に觸れずして、僞の我、假裝の我、膚寸の我と婆娑して喜べりしが、一たび悲哀の自覺に觸れてよりは、樂しかりし我が世の影は馳せて、嚴肅なる大事實は、天火の如く我が頭上に墜ち來たりぬ。悲哀の毒箭は、ひしとわが魂の胸板を貫き破りぬ。我れは如何にかしてこの毒箭を抜かざるべからず、然らざれば永劫の死あるのみ。生死一機に會まりぬ。こゝに至りて我れは復た悲哀を弄ぶ能はざるなり。悲哀は事實也。事實は事實を以て戰はざるべからず。美しくしき空想の夢はた何爲者ぞ。

吾れは血潮流るゝ心情を懷きて、唯だ戰ひぬ、進みぬ、熱き涙を以て、祈りぬ、求めぬ。而して我れは一種の貴き感應を得たり。感應はいづこより來たれる、天よりか、地よりか、

あらず、實に悲哀そのものの中よりぞ來たれるなる。天地の經綸に含まれたる智慧は遠くして深いかな。我れは無限の歎美と感謝とを捧げたり。見よ、悲哀を超越する解脱の鍵は世の永劫の初めより、密かに悲哀そのものの中に置かれたるにあらずや。

悲哀は其れ自らが一半の救なり。全く神を見ざるものに悲哀あるべからず。又全く神を見たるものに悲哀あるとなし。我儕が有する一種の悲哀は、ほのかに打見し神の面影を、白日睡々の裡に見んとする已みがたき要求の聲にあらずや。神はまづ悲哀の姿して我儕に來たる。悲哀のうち、空すべからざる一味の權威あり。我儕は悲哀を有すること、に於いて、悲哀そのものを通じて、悲哀以上の或るも

○のを獲來たる也。譬ふれば、悲哀は猶ほ冬枯れしたる我儕が靈魂の野邊に、既に窠かに萌しいてたる天地の春温の如き乎。悲哀はそのもの既に一恩寵なり、神人感應の一證果なり。カールライル曰はく、

“Man's Unhappiness comes of his Greatness; it is because there is an Infinite in him, which with all his cunning he cannot quite bury under the Finite.”

眞に悲哀に面したるものは、これ既に人類の偉大性を分有したるものにあらずや。

かくて悲哀によりて得たる一味證悟の力と喜びとは、吾が自覺に根ざしてまた抜くべからず。全宇宙もこの自覺の發達を壓止する能はず。其の證悟の力と喜びとは、吾が

もの也、何物も之れを褫ふと能はず。吾れにこの新自覺あり、而してこのありといふ自覺以外に、このありといふ自覺を證するものはあらず。されば吾れ個中の消息を何とか言はんや。前途を望めば法界の靈峰、いやが上に重疊せり。吾れは限りなく進まざるべからず、されど同時に自ら經來たれる個中山川の景を如何に至難の事なりといへども、我が力の及ぶ限り描かざるべからず。これわが分也、願也。

心性の要求

神といひ、佛といふもの、或は客觀的に實在するものにあらずとするも、之れをして自己其のものの實在よりも尙ほ確實なる客觀的實在を有せしめでは已まざる吾人主觀の

根本要求は、そもく何物ぞ。かの懷疑白眼の巨人ゾルテールをして、神もし存せずば、人、神を造ると言はしめたる此の根本要求は何物ぞ。(ゾルテールの一語は、實に彼れ自らが發せんとしたる所のものよりも、迥かに幽玄なる祕義を含む。彼れは自ら發したる此の一語の奥義に躓けり。世に人、神を造るといふばかり含蓄深き語はあらざる也。)吾人が知識といひ、真理といふもの、亦畢竟吾人心性の根本要求と其の實現とを離れては、其の意義を語る可らず。彼の自ら稱して個々の經驗的事實其のものを唯一研究の對境とすといふなる一派の自然科学者等をして、尙ほ個々の經驗的事實以外、又以上に、理法といひ、天則といふが如き種々の超經驗、超事實を附加せしめ、若しくは原子といひ、勢力と

いふが如き彼等自然科学者等自らの立脚地よりしては、理當さに極力拒斥すべき一種の形而上學的、實體學的概念をさへ備ひ來たり、之れを根柢的假定として一切の事實を統一説明せしめんとするもの、是れ亦要するに吾人心性の本具せる知識の理想[○]てふ根本要求の然らしむる所にあらずや。吾人は知識の境に於いて、客觀の事實にのみ、其の成を仰ぐものにあらず、寧ろ客觀の事實そのもの(其の分析の極する所は、竟に感覺てふ材料そのもの、更に一步を進めては、感覺そのものを成り立たしむる或外來の刺激もしくは徽號、そのもの)を吾人本具の知識的理想の圖式の内に統攝して、其の混沌^{カオス}を秩序界^{コスモス}とし、其の闇昧を光明とし、其の婆々和々を言ひ整へたる言語となす。知識構成の標準は、外

に非ずして我れに在り、我れ必ずしも件の標準を常に懸空に持すといはず、唯だ其の外より來たる感覺又は感覺の微妙と觸接するや、件の知識標準は、主觀暗中より躍り出て、妙に之れと交渉し、抱合し、之れを組織し、解釋し、乃ち知識といひ真理といふ者忽然として就る。(驚くべき事實なるかな、冥想し來たれば唯々妙法といふの外なき超絶駭絶の現象にあらずや。)真理は外より來たらずして内より發す。吾人本有の知識上の理想も、しは要求を外界に實現發展して客觀化したるもの、是れ即て森然として章ある真理の王国にあらずや。真理といひ知識といふ、亦これ竟に吾人の主觀理想が叫び出づる要求の聲を外にして在るべからず。そもく、此の根本要求の本性は何ぞ、此の根本要求の意義

本性に深く游泳せんもの、やがて見性の堂に躋り、見神の奥に入る。

心機縱横

我れに拘する勿れ。吾れ一人の生命の事實に執する勿れ。我れを環繞せる森然たる普通の生命を見よ。吾が生命の一波を載せて渾浩流轉する天地の大波に同ぜよ。淵黙して雷聲する宇宙の大音律に調べ諧はせよ。天地の生命と一樹の枝に昌ゆく心を厚うせよ。萬有と俱に我れを展べよ。空虚なければ生死なし。雲を衣とし、露を裯とし、或は孤松峰上の寂寥に嘯き、或は波間浩蕩の心に分け入る。見る所花にあらずといふ事なく、思ふ所月にあらずと言ふ

事なし。樂意隨處に動きて、人間また枯槁の郷ならず。春は心の朝霞、名もなき山に搖曳し、秋は尾花が戀袖に、懐かしき遠情を馳す。かくてぞ神は世のはかなき運命に泣く人の子にも自ら救ふべき靈し力を與へたまふなる。心機縦横、是の如くに活くるは是れ美はしく活くるなり。

自力信と他力信

自力信の信念一たび煥發し來たらんか、凡夫と雖も尙ほ古の聖者が「天上天下唯我獨尊」といへりし崇高なる意識の一角に參するを得べし。げにや自力信の大を言はん乎、美を言はん乎、權威を言はん乎、能く因果の世界を脚下に踏み能く時空の六合を翕開し、能く宿命の大繫縛を解きて、更に

之れを温かなる永劫の法衣として身に纏ふとを得、自力信の煥發する所、天地萬物を吾が一心に統攝し、山河大地草木國土をば、皆動きくゝて休まざる一念影裏の物と觀ず。自力信の意識の前には、萬物皆心靈の光と融けて流るゝなり。透明の世界也、光流の世界也。一物も得て我がこの流るゝ如き獨往獨來の自在の意識を得ぐるものはあらず。

さはれ、吾れは尙ほ他の一つのいと微かなれども極めて力ある心情の聲をぞ聽く。これ吾が響ふるに物なき寂寥と悲哀とを藏する小弱無限の意識に胸拊つ聲にあらずや。大慈の力に打すがりて、その優さしき恩寵の蔭に麻はれんと願ふ中心の歎きにあらずや。唯だくゝ涙のみ、口言ふ能はざる祈願のみ、思慕のみ、嚮往のみ、而して又歸依のみ、讚美

のみ、信樂のみ。驚くべし、癡の天地獨關の大自然そのものが、こゝにては優に美しくしき大慈の恩寵にてもあるかな。されば爾が虚驕矜夸の一念を去れよ。人誰れか何の受領はざるものを有つか、若し有たずば、何ぞ受領はざるがごとくに誇るか。我儕に一の所有なし。一切は恵也^{たまもの}賚也。我儕もし誇らば、我儕が弱さを誇れ、大悲の力を誇れ、自力ならぬ自力を誇れ。

如何なれば自力信は他力信を、他力信は自力信を撃つぞ。自力は人也、他力は神也。神と人と相抱きて、相即不二の法門をなす。自力は他力の涙に育てられ、他力は自力の光を須つて發越宣著す。「羅馬書」の著者又曰はく、艱難にも喜べり、そは艱難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を

生じ、希望は耻を來たさざるを知る。こは我儕に賜ふ所の聖靈によりて、神之愛我儕に溉げばなり」と。曾ては殆んど風馬牛とのみ看過したるこの一語、今は異しうも吾が心靈生活の深き寂しき一隅を優に燭らし暖むる光とはなりぬ。げに吾が枯槁の魂は、神より來たる恩化の露によりて、日々新生命を得るなる。自力向上の覺悟と、他力恩寵の信念とは、深く味ひ收めてこの一語のうちにあり。

(明治三十八年二月)

餘錄二題

絕對神と差別神 超絶神と

進化神

個物と絶對とを結ぶものは差別之神言ひ換ふれば進化之神也。萬有を一貫する向上の目的又は理想として活動息まざる差別進化の神ありと見て、一切の意味始めて了すべし。一切萬有は有極の神に統べ攝められて、始めて無極の神と觸接す。一面に個々物を統攝して、他面に絶對に聯なるもの、是れ差別神にあらずや。個物と絶對との間に、是くの如き差別神を投置するは決して專擅の沙汰にあらず、

絶對神は是れ一切個々物の窮極的根據にあらずや、差別神は是れ個々物の中に働きて、其を發展進化せしむる活動的原理にあらずや。之れを倫理上の言葉に移して言へば、絶對神は絶對理想にして、差別神は相待理想也。現實に根ざして、更に現實以上に其の歸趨の標的を指すもの、吾人實際の生活行爲を動かして其の向上の歩武を絶對理想に運ばしむるもの、是れ豈相待理想にあらずや。所謂絶對神は實在全體の究竟の根據として、圓滿完了の一躰として、其の根柢に横たはるもの、吾人は唯だ其の存在といふと、有といふことを直觀するのみ、能く其の如何なるものなるかを知る能はず、其は一切の思議言説を絶したる非思量底の實在也。されど、吾人の宗教的意識は、是くの如き超絶神のみを以て

満足すべくもあらず、必ずや現實に吾人の心に働き、現實に吾人の心靈生活と活潑なる交渉を有する神に打向かはさんばあらず、而して是くの如き神、是れ取りも直さず吾人一切の思慕、忻求、要求、向上、言ひがたき歎きを満足せしむる有理想の神、即ち吾人の所謂差別神、進化神にあらずや。是くの如き有理想の神ありと見ずば、吾人が差別界に於いて、眞といひ、善といひ、美といふ如き一切價値の判別、實在は、いづこにか其の窮極の意義と根據とを有すべき。絶對神は吾人を其の平等一如の海に呑み盡くして、差別界に於ける吾人一切の要求をも泡沫夢幻となさずんば已まず。蕩々たり、莫々たり、一閃の光明の、また吾人を燭らし導くべきなし。それ唯だ差別神のあるあり、吾人の差別界に於ける理想上

の要求を抹殺し去らずして、是れに眞實なる有極的意義及び價値を附與す。差別神は全法界の随つて又吾人人生の有極的、統一的、活動的原理にあらずや、極致にあらずや。個々物及び個々人は、是の活動的原理としての統一神の一枝一節として、それ〴〵適當なる位置と價値とを有し來たるにあらずや。是くの如くに觀じて、一切差別界の存在と意義と、始めて空ならず、夢ならず。是くの如くに觀じて、吾等個人と絶對神との間の、無限の空白と懸隔とが取り除かるゝ也。かの超然として萬法の根柢に横たはる絶對神は、吾人の實験學的、要求を満足せしむるには足るべし。かゝる超絶神なくば、差別神其のもの因りて立つべき絶對の根據なからむ。一切萬有の變化の底には、其の全体を支持す

る不變恒寧の基礎あり、かゝる不變恒寧の基礎なくば、一切の變化其のものの生ずべき所依なきなり。されど理想を有し、情意の要求を有し、心情の痛みを有する吾人は、かゝる不變恒寧の寂然たる實相以外に、又惠然たる差別神の實在を信ぜざることを能はず、苟も或哲學系統に於ける如く、差別と實相とを全く二元に剖きて、前者を迷妄視し去らざる限りは、全法界の根據としての神と、其の發展進行の活動原理としての神と、即ち絶對超絶之神と、差別進化之神と、この二柱の神は、吾人の哲學的、宗教的意識の到底排除し得ざる所のものにあらずや。

予輩はかく二柱の神をば立てたれど、其の意必ずしも相容れざる、若しくは相獨立せる二個の實體としての神あり

と言ふにはあらずして、唯だ一實體につきて、差別の中に働きて其を統一するの方面と、差別の上に超して其が全體の根據となるの方面とを指斥し、思想上假りに之れを抽離分別して云々せるに過ぎず。然らばこゝに問ふべきは、如何なれば差別の上に超して其の全體の根據となれる神が、同時に又差別の中に働きて其を統一するの神となるを得るか、如何なれば時空を超越せる神が、同時に又時空以内に發展するの神たるを得るか、如何なれば無極の神が、同時に又有極の神たるを得る乎といふ事也。予輩は今この至深至難の問題を釋かんとするの位置にあらず。唯だこゝには、吾人の哲學的、宗教的意識の對境として、右いふ如き二柱の神を指斥せざるを得ざると、而してこの二柱の神の間には、

或不離の關係あると、而して若しこの不離の關係を正當に看取解釋せんとせば、少なくとも之れを一種の力の關係に於いてすべきと、是れ程のとを説くに止め置くべし。(佛教が其の謂ふ眞如と諸法、即ち平等と差別との關係を解くに、力の關係よりせざりしと少くとも其の緣起論の失敗、若しくは不了に歸したる一原因なり。) 因にいふ、我邦の儒者例へば素行、仁齋等の一派が、天地を一元氣の生々發展と觀じて、氣外の理を排したるは、畢竟予輩の所謂差別神をのみ認めて、平等神を認めざるもの、進化之神をのみ認めて、實相之神を認めざるもの、この點に於いては、予輩は寧ろ彼等が極力排斥せる宋儒の理氣二躰を立てたるの見地に與みせむ。たゞ宋儒の弊は、理氣の關係を説くとの、二元的抽象に失し

たるにあり。

吾人は一面に眞如、無極、道(老子の學に見る如き)、無位の眞人、不可知、サブスタンス、等々を直觀の對境とすると共に、又如來若しくは神をも渴仰の對境として、是れに理想の實現を繋げ、心情の慰藉を措く。スピノーザが其の冷やかなる無極の本躰をば、一種温かなる神祕的熱情もて賦彩したる、若しくはヨハテ、フィロソフの徒が、絶對神と我儕個人との間に活動的原理としてのロゴス神を置きたる、若しくは佛教に謂ふ報身説の如き、いづれかこの宗教的意識の要求に出でざりける。神(絶對神)と人との間の中保(媒)の觀念は、吾だに思想史上の一現象として趣味あるのみならず、實に吾人の宗教的要求として、抜く可らざる深根柢を有するなり。

平等と差別

平等と差別との關係は、スピノーザの哲學に於ける如く、
 佛教哲學に於いても、未だ十分なる解釋を得たりといふべ
 からず。佛教は少なくとも其の原始の根本思想に於いて
 は、平等一如なる眞如をば唯一の實有實相として、差別の萬
 象をば畢竟其の實相上の戯れ、空華に過ぎざるが如くに觀
 ず。差別の萬象は、實相其のものに取りては、謂はば餘計の
 もの、餘食贅行なりとせらる、一言すれば無明の迷なりとせ
 らる。假令、平等即差別と説き、理事無礙なりと説くも、その
 差別といひ、事といふものが、本來如何にして生起し來たれ
 るかを問はざるべからず、如何にして平等に即して差別の

存するか、理に即して事のあるかを問はざるべからず、一言
 すれば、差別其のものの生起するに至れる十全正當なる根
 據の、いづこにあるかを問はざるべからず。而して佛教哲
 學は、之れに答へて、少なくとも差別生起の正當なる根據の、
 實相其者の中に存せざるをいふ。其は寧ろ實相以外の根
 本無明に生じたる妄念なりと説く。されど謂ふ所、無明と
 は何ぞや、忽然念起こりぬといふも、其の念の起くる原因は
 眞如以外にありとは見る可らざるべし、而かも平等一味の
 理躰なる眞如より、如何にして差別の根本原理たる無明の
 念の生ずるに至れるかは、竟に不可解事に非ずや。或は又、
 眞如緣起説を舍てて、阿頼耶緣起説を提げ來たり、眞如其の
 者に萬物緣起の原因を求むるは非なり、萬物緣起の原因は、

一切差別の種子を包藏する阿頼耶の一識に求めざるべからず、阿頼耶は是れ普だに官覺知覺などいふ主觀的知識を生ずるの根本たるのみならず、更に官覺知覺の客觀的所依と見らるゝ一切の物質的實在其のものをも自ら産出するものなりと説かむか、是くの如き無限の大産出力を有する普遍的意識の實在を認めて、其處に一切差別生起の一因を置かんとする一種の唯心論的緣起觀は、獨逸哲學の一系統にも似通ふ節ありて、博大深邃の見地なりと推すべきも、謂ふ所阿頼耶と眞如との關係は、更に深く精説を要すべきものあり。問うて曰はく、阿頼耶は眞如の内乎、外乎と。阿頼耶若し眞如に依屬する第二義諦のものならば、更に問ふべし、眞如てふ平等一色の理體が如何にして萬差別の根本種

子を包藏する阿耶頼の一識を生ずるに至れる乎と。要之、眞如其のものが直ちに萬物を緣起せりと説くも、眞如の外に阿頼耶識といふものありて、そが萬物を緣起せりと説くも、説明上の困難は依然として甚だしく減ぜざるなり。佛教哲學は、竟に差別生起の十分且つ正當なる理由若しくは根據を有せざるに似たり。按ふに、佛教は其の唯一實相、眞如よりしては、到底正當且つ十分に差別の緣起山來を説く能はざる特殊の位地に立てるなり。何が故ぞ。吾人の見る所を以てすれば、佛教が差別を説くに難んずる少くとも重大なる一理由は、其の専ら實相を唯知的 (Intellectual) に寫象し、寂靜的に觀じて、其を情意の衝動として寫象せざるにあり。其の生起因たるべき力の方面、動力的方面を抽象し

疎外し去れるにあり。是れ其の忽然として起る無明の妄念に、現象因果の第一起端を置かんとするが如き一種窮屈なる説明を下ださざるを得ざる所以にあらずや。もと
 く論理的理躰として寂然として靜かに萬法の底に横たはれる眞如てふ如きものが、時間内に差別の萬法となつて發展生々し來たるべしとは、吾人の思議に上らざる事相にはあらずや。佛教が緣起論に躓ける所以、畢竟こゝにあり。スピノーザの躓ける所以、亦實にこゝに在り。而して、二者が兎角、差別界に於ける眞善美の森然たる價値の實在を空華視し去らんとせる傾きある所以、亦復た畢竟こゝに在るにはあらずや。

一と多、平等と差別との關係は、眞に説き易からず。惟り

佛教哲學が此の問題に躓けるのみならず、希臘古來の歐洲哲學、又復た幾たびか之れに躓きたり。平等對差別の關係は、尙ほ幾多後起の哲學者の解釋に須つべき最難入、最難透の問題として残るべし。而して吾人は實相を唯知的に寫象する佛教哲學に於いて、この問題の解釋の殊に困難なるものあるを見る。眞如實躰を知的、寂靜的なる理躰とのみ觀じ去つて、其の力的、衝動的、方面を觀ぜざる、是れ佛教哲學に於ける根本闕典にあらずや。

明治三十八年二月

偶思録

(デロップとポロ、希臘的意識)

と基督教的意識)

舊約に見はれたるデロップの道德的自信の盛大なるは、何人も驚嘆する所なり。デロップは、かの神を辯護して彼れを言ひ伏せんとて出て來たれる三人の友よりも、尙ほ深く神の測る可らざる大能大知を知れるもの也。然るに尙ほ一片自家の道德的自信に立つや、宛ら無畏の獅子吼の如くに、きほひにきほひて、飽くまで自ら是として神の不法を譏めて已まず。あはれ、世にわればかり無垢清淨の義人は

あらしを。見よ、神われを試み給はば、われは金の如くにして出て來たらむ。わが生涯のいづこに、いかなる一點のきみ、穢れはあるぞ。何とて爾は無慈悲なる鐵くろがねの筈をば、骨も折れよとわが頭上には打ち下くだしたまふ。嗚呼、神よ、乞ふ、理あらばわれに答へたまへ。乞ふ聽かむ、乞ふ應へよ。夫れデロップは、なほ幼稚なる時代の思潮に限られて、未だ人間人格の尊貴を知らざりしもの也、尙ほ神を常に天上に在まし、人を地上に匍ふ蛆蟲の如くに觀たりしもの也。而して其の一たび自ら是とする道德的自信の上に立つや、浩浩の一氣、神に薄まりて、直ちに彼れと曲直を争はんとす。わが無上の道德的標準を揮りかざしては、逆しまに神其者に批判を加へんとす。かくて、煩悶、苦惱、怨恨、不平、呪詛、嘲罵、毒舌

の噴火、炎々騰上し來たりては、かの巖に頭振りつゝ、賢さかしが
りたる三人みたりの友の唇の慰めは、復た一片の春雪よりも力な
かりし也。偉なるかな、デロップの道德的自信。されど聽
けよ、世にはデロップの聲よりも尙ほ偉いなる聲あるを。

ポロロ曰はく、われ自ら顧みるに過あるを覺えず、然れど
も是れによりて義とせられず、われを評はかるものは主也」と。

何等の自信、而して何等の謙遜。デロップの道德的偉大を
見たる吾人は、ポロロの一語に、更に別様、更に深奥の偉大を
見る。デロップの偉大は未だ救はれざる者の偉大也、ポー
ロの偉大は救はれたる者の偉大也。彼れは神を見ざるも
のの聲、是れは神を見たるものの聲。彼れは天空に迫まる
巖々たる山の力を現はし、是れは星を涵し、月を沈め、萬類を

深藏せる洋々たる大海原の平和を歌ふ。自ら是として謙
らざるデロップは、竟にポロロの結論に來たらざるべから
ず。デロップを救ふものはポロロなり。思ふに、デロップ
が終ひに一たびまのあた面りに神を見て、達したりと思はるゝ、解脱
の内容は、ポロロが件の一語に、いみじくも言ひ表はしたる
ものと同じかりしなるべし。否、同じからではあるべから
ず。

自ら顧みて、疚ましからざるの一念ほど、人をして強から
しむるものはあらず。自ら是とし、自ら恃み、自ら重んずる
の意氣、こゝに旺然として生じ來たる。されど、吾人は是く
の如き道德的自尊心の横溢せる折だに、時に瞿然として深
き罪障の意識に襲はるゝことあり。自ら是とする心の底

に、空虚の深淵横はりて、われらが性の脆弱に泣かざるを得ざる、これ何の故ぞ。吾人はわが徳行を自ら是とするには、時に餘りに深き歎息ある也。世の道德學者等、輒ち是くの如き心状態を不健全もしくは不正常とす。されど彼等が見て、不健全、不正常とするもの、やがてわれらが宗教的生活の高き一ふしにはあらずや。道德上の自尊は、男らしき、公明なる、自然なる態度なるべし、されどそは未だ人心の聖域に觸れたるものとは謂ふべからず。

古希臘人は自ら是とするの心に富みたり。彼等は憚る所なく自己の徳行を誇りたり。われ自らの理性を働かし、辛勞努力したる結果として得たる徳、これをしも重んじ、尊び、誇るに何の非かある、自尊は美德なり、何ぞ謙々として

自ら卑らし、自ら小とせんやといふもの、是れ實に彼等が不斷の自覺なりし也。セテカが唯だ一つ賢者は神に優る、神の何物に對しても畏るゝ所なきは、其の性に負へるなれど、賢者は之れを彼れ自らに負ふと言へる者、希臘人の自力的、自尊的、道德を道破し得たりといふべし。然るに轉じて基督教(殊に初代、中代の)の道德的意識に見んか、こゝには自ら是とする自尊心を罪惡視するに憚らず。基督教徒は、自恃自尊の道德を惡魔外道の道德と見たり。彼等の貴ぶ所は、謙讓也、卑下也、抑損也、自小也、無力もしくは孤弱の感は、彼等を支配する根本の氣分なり。彼等は常に痛歎の胸を打つて、自家の罪業を神に訴ふる也。彼等は常に自ら言ふにも足らぬ「無益の僕」と思ふ也。彼等は希臘人の所謂「方正之人」

よりも、智慧も力もなきいと哀れなる罪人こそ、なかくに救の門に入るに適はしき者なれと見たる也。總じて希臘的道德と基督教的道德とは、事毎に兩端の觀をなしたる中に、自家の徳を自家、是とする件の自尊的意識の如きは、その最も著るき者にあらずや。希臘人は自家の理性をもて情欲を調御訓練する所に誇るべき徳行華さくといふ。基督教徒は是くの如きは寧ろ罪惡にして徳にあらずといふ、その美德と見らるゝだけに一層の「大惡」なりといふ。尊者オ・ゴステンの見の如き、正さしく之れを代表す。曰はく「靈魂の身軀を支配し、理性の惡衝動を統一するは、稱すべきに似たれども、而かも靈魂及び理性そのものが、神命を奉事するにあらざれば、其は斷じて能く身軀及び衝動を調御する

能はじ。神を知らず其の鑑照の下に服せずして、諸惡の源たる惡魔の腐敗に浸漬せる心が、身軀及び不徳の主たりとは、そは果たして如何なる主なるべき。徳若し神と何の交渉もなからんか、そは眞の徳に非ずして寧ろ不徳也。……かかる徳は、矜大にして傲岸なるもの、随つて徳にあらずして不徳と見るべしと。オ・ゴステンの見の一端に明せたる言はず、唯だ彼れが自力自尊の意識をもて勝れる希臘道德を痛撃せんとしたるの意、吾人をして反思せしむるに足る。自らは是とする希臘的意識是なる乎、自家罪障の老げさに泣く基督教的意識是なる乎。こは今斷ずべき限りにあらざるべし。吾人は唯だ自家至深の要求に忠ならんがために、希臘的意識に最後の宗教的總合を加ふるの已むべか

らざるを思ふ。而して翻へりて思ふ、デロップ(煩悶中の)の
道徳的偉大は、要するに希臘的偉大を出でずと。吾人がデ
ロップと共に達すべき究竟の解脱地は、ポーロが前の一語
に證示せるの位地ならざるべからず。一切衆生は、自ら是
とする自家の徳行によりて、神に義とせらるゝ能はざる也。

(明治三十八年四月)

人に與へて煩悶の意義を

説く

傲

貴書に曰はく、煩悶の模倣流行は厭ふべし。曰はく、煩悶
は今の青年の嘖語也、道樂也、虛榮也。曰はく、煩悶は人をし
て小心過感ならしめ、堅忍力行の氣力を殺ぐ、曰はく、煩悶は
人をして主觀的、個人的、利己的ならしめ、利他兼濟の事功に
冷淡ならしむ。曰はく、煩悶、到底人生の謎語を解くに足ら
ず。曰はく、煩悶或は已むべからざらんも、そは竟に悟に到
る手段に過ぎず、之れを誇るは愚也。曰はく、煩悶はなるべ
く手輕に淡泊ちひさと濟まして、直ちに目指す彼岸の安心をこそ
冀ふべきなれ。曰はく、煩悶は人の子を賊うて懷疑、厭世、自

人に與へて煩悶の意義を説く

殺の淵に陥らしむ。曰はく、煩悶竟に勞作に如かず、人生は考ふるにあらざして働くにあり。曰はく、何、曰はく、何、而して結案を下だして曰はく、煩悶非也と。あはれ、君が煩悶を厭ひ闢くの辭や、力めたりといふべきかな。いかなれば君、曩には煩悶を見ると神の如く佛の如くして、今は鬼の如く蛇の如くなれる。君、人生に負ける乎、人生、君に負ける乎。何ぞ君が煩悶を説くとの世間流俗の士には似たる。問うて曰はむ、君が煩悶を難ずるは、煩悶の伴弊に對してなるか、將た煩悶其のものの本義に對してなるかと。前者ならば君を待つて知らず、後者ならば君恐らく惑へり、誤れり、欺けり、思ひあがれり。疑ふらくは、君は曾て煩悶を経ずして經たりと意へり。煩悶の意義を知らずして漫りに之れを排

し去らんとする、そもく何の意ぞや。予の不明尙ほ君に教ふるの權利あり。乞ふ語らむ、乞ふ聽け。

凡そ有りとするもの、生きたし生けるもの、何れか自家分上の煩悶なからむ。煩悶は萬有之向上形式也。水の流るゝ、やがて煩悶なり、大海の懐にあくがれ行かんとす。煙の騰る、やがて煩悶なり、靜かに天上の雲と合せんとす。魚の形したるものは鳥の形したるものに、鳥の形したるものは獸の形したるものに、獸の形したるものは人の形したるものに、彼等皆おのゝ本然の我を求めて躋る。そこに無聲熱烈なる戦あり、煩悶あり。所詮一切の煩悶は、自己以上の自己を産まんとする煩悶にはあらずや。而して煩悶のうち最も崇高を極むるは、人、神を産むの煩悶なり。

一切煩悶なき生活、君は羨ましとや。是れ取りも直さず白く塗りたる墓の中は、淺ましき虚を孕める生活を羨むなり。何事にもあれ、人その得意満志の鼻蠢かして、思ひあがり、笑みくづるゝ時ばかり、虧隙多きはあらじ。七つの悪鬼も來たり住みぬべしと、いと淺まし。譬へば霜柱の燦として、装ひいかめしきが如し、指頭一彈して早くその影を留めず。かの悲痛煩悶と戰ふものを見よ。彼等に天魔の乗ずる能はざる一念の充實あるにあらずや。面を撫づる春風に、空調浮響ありて、寒林に吼ゆる北風、に剛健至誠の聲あり。快樂は以て豚を救ふべし、以て人の心靈を救ふに足らず。人を救ふの力は煩悶也、煩悶の導き到る解脱也、大覺也、祝福也。自己存在に對する煩悶、嗚呼世にこの一味の自覺ばかり、沈痛にして深奥なるものありや。大地聲を合はせて叫び、諸天偕に來たりて悶を苦しむ。これ詩ならんや、げに吾等が有するこの一個の自覺こそは、あらゆる有情無情の煩悶を會萃して、一點の白熾光と現じたる者也。わが一己の煩悶と解脱とは、即ち全萬有の煩悶と解脱とを合はせ攝めて代はり立てるに非ずや。人一たびこの境に立つ、即ち我及び萬法の生死巖頭に立てる也。生乎死乎。死も亦光榮、生も亦光榮、生死悠悠、復た論ずるに足らざる也。是くの如くにして煩悶と戰つて死す、これ充實の死也。是くの如くにして煩悶と戰つて生く、これ亦充實の生也。男兒苟もこの自覺の域に入る、生死を一擲して、其の全人の科を盈たすべき也。何物の怯兒狡兒ぞ、生死一間の巷に立ちながら、自

人に與へて煩悶の意義を説く

ら欺き、安きを偷みて、この嚴肅なる自覺の事實を掩ひ、避け、弄ひ、推諉百端せんとはする。

げにや自己存在に對する煩悶は、我等が宇宙の根柢より遽然として醒め來たれる一種無類の自覺也。いかなれば人のかゝる苦きく自覺の重荷を負うて生まれ來たるべきかを知らず、唯だ知る、われ今、眼前にこの火よりも熾かなる事實の前に立てるを。嗚呼、人の百意欲のうち、自己存在ばかり愛著の道深きは、あらじを、一たびその人生的意義に惑ひ、惑うて安きを得ざるや、竟には自己存在其のものをさへ詛ひ、詛うて已まざるなり。我てふものの生まれいでざりしを願ひ、死にて生まれざりしを願ひ、生まれて死なざりしを願ひ、更に併せて天地萬法の存在を根柢より都滅せん

ことを願ふ。何等の破壊ぞ、何等の闇黒ぞ。たゞ惑ひ也、疑ひ也、恐れ也、驚き也、悲しみ也、寂びしさ也、孤獨也、神祕也、不可測也。半夜聲を揚げて天地の間に疾痛を訴へて、去かも感應の聲、寂として來たらず。この時寧ろ一死の甘きに就かむか、須らく問ふべし、死は果たして甘き乎、死は一切を了するに足る乎、死はわが常而の大問題たる自己存在の意義に光明を與へ得る乎と。然りと信ずるものは、進んで死を抱き、然らずと信ずるものは、死の淵より踵を旋らして、復び曩の大叫喚の悲に立つ。死する能はず、煩悶の闇黒に堪ふる能はず、さりとて曩昔の無意義の生を繰返す能はず。慘ましいかな、この矛盾、この懷疑、この煩悶。然れども君見ずや、この悲哀之人、煩悶之人の有する一種崇高なる權能を。國

家はそのいかめしき歴史を以てして、道徳はその先天の當行を以てして、法律はその神聖を以てして、習慣はその古道を以てして、人道はその慈眼を以てして、美術文藝は其の快活優美を以てして、尙ほ皆膝行俛首來たつてこゝに其の自家究竟の意義及び位置を聽かんとする也、聽かざる可らざる也。これら一切乃至は全法界の實在を擧げて、一夢と空じ去らんも、はた其れをして無限の價値ある存在たらしめんも、竟に「繋りてこの煩悶之子の叫び出づる一結論の聲にあり。煩悶は堪へがたき苦痛也、悉かも人類無上の光榮也。君はこの煩悶の苦惱と闇黒とはた權能の意義とを會てみづから切實に經たるとありや、もしくは經ずして煩悶と煩悶之人とを哂ひ且つ難せんとする乎。そもく亦過て

り。然らば如何。吾人は煩悶の苦惱と闇黒とを怖れて永へに却走し、而して永へに走屍行肉の沒意義を踏むべき乎。嗚呼これをしも忍ぶべくば何をか忍ぶべからざらむ。われは寧ろかの笑つて永劫の闇に床を展ぶるの、一段充實の意義あるに就かむとすべし。かくてわれは唯々忍びぬ、戰ひぬ。而して竟に面りに神を見たり、神に會へり。(われは好んで心靈の勝利を誇らんとにあらず、唯だ自ら詐る能はざるこの稀有妙法の心證をば、白日の光の如くに世の心惱める未知の友に傳へんとを願ふ。これを願うて我が心焦躁す。)今の我れは煩悶渦中の人ならず、少なくとも解脱新生の一角に立つて煩悶の福音を説かんとはするなり。嗚呼、われ至微き神の僕の一人にしあれど、神恩常に身に餘)

ぬ。かるが故にわれ憚らずして人に對つて煩悶の意義を説く。

君は曰はく、天地人生の謎語、豈煩悶の解き得る所ならむやと。あはれ曾て煩悶を経たることなき君はしも、いづこより草々としてかゝる大膽なる結論をば引き來たれる。君は未だかの人生詩人が、涙を以て冷たき麴麩を割きながら悲しき一夜を泣き明かししとなきものは曾て上天之力を知らずと歌へりし詩の意をだに、志みくくと身に志めて味ひたまひしとあらじとこそ覺ゆれ。君聽けげに人生の謎語は永へに全く解くるの期なきかも知らず。さはれ、若し其の一點一角にだに光を與へ得なば、是れ既に一氣神に薄りて實在の奧秘を捉らへ得たるものにあらずや。「全き

もの來たらば全からざるもの廢たるべし。されど、全からざるもの悉く廢たるにはあらず。個中鏗爾として神に觸れたる心證の一點一角あるを打消すよしあらざればなり。達者曰はずや、佛教は山に登るが如しと。惟り佛教のみならず、一切宗教の悟に、不斷の發達あるを事實とせば、煩悶の超越即ち解脱の、一部一角的なるを以て之れを斥くるは、いみじき僻事ならずや。君もし更にこの意味にての解脱即ち悟をさへ、古聖がすべて世を欺く狂言のたぐひに過ぎずと拂拭し去らんか、われ論理的に君を破せんやうなし。さはれ、君若し予及び予の言説に信を措かば、君尙ほ君の自覺は、予の自覺にあらずと言ひて予の言を信ぜずば、それまでなれど、こゝに如何にしても君をして所謂一部分的の解脱(悟)

の明燈々たる金文の如く人心裡に存するの事實を信ぜざらしむるを得ざる一道こそあれ。そは他にあらず予みづからの一個の心證これなり。今こゝに君に對つて予が見神の自覺内容を詳示するの餘地なければ未だ猝かに君をして曩の疑惑を釋かしむるに足らざらんなれども予が今現に有する心證一味の世にも稀有なる光明は異日よく君が心光を點じて限なかるべしと信ず。嗚呼古聖一切の悟なるものもし悉く自ら欺き人を誥く荒誕不稽の狂言妄語なりとするも予みづからの受け得たる一點不壞の靈しき貴き心證のみこそはわれみづからの前に君の前に天地神明の前に欺くべからず枉ぐべからざる眞實無妄の眞理にてあるなれ。(本書三六六頁予が見神の實驗の一篇参照)

君は曰はく煩悶は解脱の悲しむべき手段方便なりと。これはおのづから前の事と關聯せしめて説くを得べし。さなり言ひ得てよし。されど煩悶は解脱の手段たると共に一面には又その一内容たるの意義あるを觀ぜざるべからず。煩悶と解脱とは同じ生命の血を分けたる姿異なる兄弟なり。たとひ一たびは悲しき袂を別かつて東西異境の天に踏み迷ふことありとも誠ある感應の手はやがて彼等を導きて意はぬ十字街頭に相抱擁せしむべし。積疑の下に大悟ありと古人はいへり。されど疑と悟とを全く別かつは非也。明確に十全に疑ひのある所を看取して、それを如實に、誠實に掲げいづるは、やがて悟其のものに一步を進めたるものにあらずや。疑ありて而して後に悟てふも

人に與へて煩悶の意義を説く

ののありとのみは言ふべからず。疑中悟あり。疑の眞闇の中に悟の光はやくもさしそめて、窈冥一路げにいづこよりをか疑の始めとし、いづこよりをか疑の終はりとはせむ。疑の色はむしろ薄明なり、やがて大明の空に明けゆくころを含むなり。驚くべし人心の構成。疑てふものあり、而して疑其のものの中に、本來疑みづからを超越解脱すべき對境の早く竊かに仕組まれたるにあらずや。誰れか之れを然らしめたる。嗚呼こゝに至りて、何人か「天真而妙」と讚じ、何人か「神の知と識との富は遼いかな」と歎ぜざる。さればわれ何をか言ふべき。唯だ言はむ、大いに疑ひ大いに煩悶して、大いに悟り大いに解脱せよと。所詮、煩悶は悟もしは解脱の單なる手段、單なる External means と見るべきもの

ならず。君誤れり、煩悶と解脱とは、やがて實相一味の法の海に融會すべき一波一浪なるものを。煩悶の中に神の面影動けり。煩悶其のもの既に一種の力也、恩也。

君は曰はく、煩悶はなるべく手輕にあつさりと濟ますがよしと。君の言葉としても覺えず。唯だ諗けて曰はむ、我等が煩悶は已むことを得ざる心奥の聲の迷溢なり、塞ぐべからず、弄ぶべからず、鉢植の花木を剪裁するが如くすべからずと。煩悶と信仰、豈足駄の齒の高低自在に抜きさしするを許すが如きものならんや。一たびこの慘ましき自覺に入りてよりは、我等が全人の Noble discontent の満足せらるゝまでは、どこまでも進み戦はざるを得ざる也。たとひわが長途の生を駛せ且つ戦うて、尙ほ蹉跎として傷つき斃

るゝことありとも、察々の鑑天地の間に在り、何をか怍ぢ何をか歎かむ。豚の如く安心せんよりも、人の如く永へに不満の天を攀づる、是れ實に我等が冀ふべき充實生活なり。それ眞摯なる疑惑を抱いて神の公義に服せざりしデロツプは、却つて神の公義を辯護せる彼れが唇薄き友よりも是とせられたるにあらずや。陋しいかな、煩悶の荆棘^{いばら}まげき路を経ずして、直ちに安養淨土に到らんとするもの。哀しむべきかな、全我の要請に忠なる能はずして、早くも一部の我に讓歩して、蒼皇として折衷彌縫の信生活を營まんとするもの。必ずしも苛細の見を取つて世の善男善女を律せんとはあらず。魚頭蟲臂も、若しよく彼等を救ふの力あらば、われこれを薦むるの涙なからむや。われは唯だかの

自ら窄き門より入れりと稱する覺者先達にして、多くは自家安心の佞者たるを惡む。君見よ、この種の人に限りて多くは又大膽なる理想主義の主張の危険を唱へて早くもこれを現實と調和交綏せしめむとす。理想と現實との調和、さしも容易の談にあらず。今の理想現實調和論は多くは彌縫論也、釘釧論也。今人の多くは理想をして其が本來之くべき光輝ある峰頭にまで之かきしめず、早くその五合目、六目あたりより踵を回らして、現實の平面に逶迤膝行せしめんとす。是れ宛も脊中合はせの夫婦を強ひて一室に押し込めて室家の安きを誇る者也。それ眞の理想は偉大なる煩悶^{わづらひ}底中より靈光四發し來たる。唯だ要す、この眞理想を諦^{あきら}かに視、深く味ふを。一たびは父を遺て、君に背き、一切

人に興へて煩悶の意義を脱く

現實を葬りてまで、この眞理想を追ふの工夫あるべき也。此くの如くにして體し得たる理想こそ、始めて能く内より現實を潤ほし、温め、化育し、救拯して、寂光莊嚴の土たらしむる力あるなれ。世の所謂理想の現實に對するや、高さより命じ、外より掟てす。未だ深く現實の中心に入りて其を動かすの力あらざる也。其は多くは未だ自ら救はれざるの理想也、その現實を救ふの力と生命となき、固より也。そは要するに死法にして活愛にあらざる也。

君はまた煩悶の主觀的、利己的なるを難じて、社會的貢獻の要を言ふ。極めて理あり。たゞ予は思ふ、今の所謂慈善家、博愛家の中には、己が脚もとの踏跟けるに氣づかずして、他の手を扶け取らむとする類ひ、いと多しと。貢獻を言ひ、

利他を言ひ、兼濟を言ひ、社會人道に對する義務を言ふの前に、吾人は須らく顧みて己れの克くその任に堪ふるや否やを檢するを要す。それ深く自己人格の根柢を養うて珊乎たる徳器を圓成し、徳本を植うる、これ亦偉いなる社會的貢獻にあらずや。世の事功を言ひ貢獻を説くもの、こゝに一隻眼を開くを要す。彼等の多くは未だ眞に利他貢獻の意義を知らざるなり。曾て大いなる煩悶を経たるとなく、眞の理想を見たることなく、信念なく、修養なく、何等見るべきの準備なくして、逸々ひとへに社會の貢獻を言ふは、是れ所謂警者警者を導くものなり。哲人便ち曰はく、導くものも導かるゝものと、共に歩まざるの安きに如かずと。

君は煩悶の模倣流行を厭ふ。予も亦之れを厭ふ。煩悶

人に與へて煩悶の意義を説く

はちのが心靈上の事なり、他の煩悶を己れのと取り代へ、若しくは借り來たり、若しくは附麗して、またり顔なるは何の意ぞ。煩悶は己が自覺上のこと也。世のトルストイを語り、ニーツェを語り、日蓮、親鸞を語る者、己が煩悶と信仰とを二の町にし、或は全く差しおきて、彼等の煩悶と信仰とを絮説するに忙はしげなるは何の意ぞ。(予は固より先覺の宗教意識を學び且つ之れを世に紹介するを非とせず、これ甚だ善き事なり)。自己の煩悶と信念とは、トルストイのよりも、日蓮のよりも、親鸞のよりも、釋迦基督のよりも、一期の大なる事なるを知らざる乎。何等の遠慮漢ぞ、先づ自己の煩悶と信仰とに忠ならんとはせずして、彼等の煩悶と信仰とに忠ならんとはする。彼等は畢竟皆わが心證の一註脚にあら

ずや、一器具ツクリにあらずや。さはいへど、今の青年の中には、眞摯なる態度を取りて心洵に人生の意義を辿らんとするもの、尠からざるを見る。君とわれと、乞ふ餘りに現代の思潮を悲觀すると勿らむ。

君は煩悶が人の子を厭世自殺の淵に導くを恐る。予はむしろ煩悶が未だ人をして厭世自殺の淵に入らしむるほどに眞面目ならざらんを憾む予を以て好んで激語するものと思ふ勿れ。嘗て厭世と言はず、自殺と言はず、深く人生の意義に惑ふものは、直ちに全世界、全人類の存在をさへ詛ひ誣うて其の都滅皆空を冀ふなり。何等の否定ぞ。されど大いに否定するは大いに肯定せんがため也。大死一番、纔かに蘇し來たりて則ち眞生命と撞見す。故に曰はく、煩

人に與へて煩悶の意義を説く

悶恐るゝに足らず、唯だその眞面目ならざるを恐ると。若しそれ、かの自殺者に至りては、今の滔々たる自殺多くは非也、情洵に悲しむべし。唯だ其の全我の要求に殉ぜんとして形骸を抛てる精神態度に至りては、殉道者の風ありと云ふべき也。自殺は洵に悲しむべし、自殺は竟に煩悶の根本問題を解かず、自殺は人類の貴き、されど悲しむべき一犠牲也。

終はりに君は曰はく、煩悶竟に勞働に如かず、人生は思考にあらずして勞働にありと。さはれ、是くの如き一種の結論もしくは信念は、其の是非如何は且らく措きて、取りも直さず君が曩に極力排拒せる煩悶そのものを經て方さに到り得べきものならずや。深く人生的意義に分け入るとな

くして、かゝる一種の理想、信念の形づくられんやうなきにあらずや。若しそれ世の事功家、經世家なるものが煩悶思索の生を一概に無用視し、不健全視して、偏へに勞働主義の福音をのみ唱ふるに至りては、是れ人の子を驅りて、かの眼なくして行く地下闇中の營者たらしむるもの、淺慮の見むしる笑ふべきなり。

如是の言君は以て深辯に過ぎたりとなす乎。實に已むを得ざれば也。予は必ずしも凡ての人に煩悶の苦き杯を飲めよと言はず。唯だ一たび人生問題に躓きて、心誠にその眞光明を得んと冀ふほどのものが、この窄き一門より入るの誠實と大膽とを有せざるはいとく惜しからずや。煩悶を誇るは非也。されど煩悶なきは人の不幸也。君に

對つて煩悶の福音を説く、實に已むを得ざる也。意急にし
て辭章を成さず、幸ひに教示を待つ。

(明治三十八年四月)

心の一ふし

法友

わが心の窮極に願ひ求むる所は、又彼れの心の窮極に願
ひ求むる所、わが衷なる深き悲哀は、又同じく彼れが至深の
悲哀なりと觀じて、こゝに我れから心の調べを合はせて、一
切の人に打對はんか、何人か皆第二の吾れならざる。性情
や、傾向や、年齒や、門地や、器量や、材幹や、職業や、學問や、徳行や、
此等すべてのものの相違は、この眞の人としての眞實なる
抱擁には何の妨げともならざるべし。是くの如き心情の
高調をもて相抱きたる友、之れを法友といふ。

白眼の友は言はず、青眼の友あり、心胸の友あり、斷金といひ、刎頸といふ、皆わが心を取つて他の心に置く赤心相許の義ならざるはなし。わが所謂法友の義は、尙ほこれらと相殊なり。思ふに、わが心の底に深く潜める一種の願ひと悲しみとを凡ての人の中にも観じて、此に同情の中心點を置く、これ取りも直さず慈眼視衆生の菩薩心にあらざる乎。苟も常にこの心を躰して、彼れ我れに乖くとも、我れ彼れに乖かじとの一念だにあらんか、縱令我れを呪詛し、嫉視するものありとも、我れは尙ほ彼れが、内人真人に分け入りて、俱に偕に歎き祈るの法涙なかるべしやは。(これ實に聖者尙ほ到り難しとするところ。) 此く觀じて、吾人は所謂罪過と人とを別かつとを得。如何なる罪過の醜惡相の底にも、尙

ほわれと同じ要めと歎きとの動ける見れば、嗚呼彼れにも亦人生の大哀なきには非ず、唯だ未だ中心誠に其の歎くべき所、祈るべき所を知らざる也との感、溫然として湧生すべし。「われに惡を仕向けんものをば寧ろ憐れめ、彼等が罪過は、畢竟無知より來たる」とは、是れ羅馬ストア派の賢人の諗ぐる所にあらずや。かの十字架の上にありて、父よ彼等を赦し給へ其の爲す所を知らざるが故也との世にも比ひなき崇高無上の祈りをなしたる基督は、取りも直さず彼れが人類を一如根本の悲哀と要求との上より觀じて、其の一切の偶然の過誤、皮相の罪障を放過し去りたる神心かみこころそのものにあらずや。

野邊に生ふる若草の滋きを見れば、吾れも一つ緑に萌え

出てんの思ひあり。夕べの空を淋しげに徂く孤雲のゆくへを眺めては、轉たわが身世のゆくて覺束なき心地ぞする。こゝにも一種の同情と感應とあり、さはれ、こは要するに、折ふしに過ぎゆく景情の會々織りなせる詩觀の彩なるのみ。吾人はこの詩觀以奥に尙ほ深く自然萬有と結縁すべき恒久眞實なる或者を觀じ得ざる乎。吾人は「自然」の中に「人」を見得ざる乎。「Man vegetative」を發見し得ざる乎。一言すれば「自然」の中に、われらと同じ悲哀と要求とを分かつてる法友を觀じて心跳らざる乎。傳へいふ、アシ、の大徳フランシスは、己が飼養せる籠中の小鳥をも常にわれらが兄弟と呼びて説教をなしたりと。彼れにありては、禽獸も亦人類一味の悲哀を分かちたる假りをめならぬ法友なりけるな

り。彼等も同じ「神の都」に旅だつ法界有縁の同行者なりけるなり。かくして吾人は詩觀以外に眞實觀を有す。眞實觀とは、則ち一切の有情無情の中に「人」を觀、法友を觀ずるとにあらずや。

恩惠の生活

心の雨風繁き折ふし、ふと夜半の夢さめて、恩惠の月影いとさやかなるに、まみくとうれしく、衷より喜びの杯溢るゝの思ひせしこと幾たびなりし。今や圓かなる恩惠の月は、わがいふせき蹉跎生活のいかに雲濃く立ち蔽へる間をも洩れ來たらずといふとなし。恩惠はわが恒常の所有とはなりぬ。感謝す、わが一切の自力、向上、奮勵、努力は、神の惠

みの河床かほとに打沿うて、日ごと夜ごとを澱みなく流るゝなり。神の恵に依るなる平和信樂の意識は、わが心の不斷の背景とはなりぬ。この背景の前に又上に、わが自力の手は大膽に伸び、わが自由の足は活潑に動く。

自ら願みるに、自由もしくは自力の意識、儼として我れに在り。否むべからず、抹すべからず。この意識は、如何なる科學上の必至論、宗教上の定道論を以てするも、尙ほ且つ撼かしがたき光輝ある意識、直接の自證也、自信なり。誰れか神の恩恵を必至的に絶對なりとは言ふ。他力絶對觀や可し。さはれ、神の他力恩恵は、われらが自力自由の意識を存在せしめざるほどに狭く貧しきものなる乎。決して否らず。自力の意識の高く盛んに潮さし來たるほど、他力感恩

の優なる意識も、亦盛んに高潮し來たる。われ知るすべて奇くしき妙たなるものは、直ちに上天の賜として來たることを。眞まに自由といひ、自力といふものの靈くくしき力の存在を味ふものにして、始めて深く強く神の他力恩恵に觸るゝことを得べき也。われらが受け得たる他力の意識は、自力を包みたる他力の意識なるなり。

われは世より我れを救ひ出だし給へとは祈らじ、世に勝つ信を與へ給へと祈らむ。かくして神より得たる自力の信念を以て、世にある限りを戦はむ。戦うて若し破れんか、ますくわが力の弱きを知りて神を仰ぎ頼むべし。戦うて若し勝たんか、われをして勝たしめたる神に感謝して、倍々其の大悲恩寵の力に打すがるべし。敗るゝも感謝なり、

勝つも亦感謝也。これわれらが調べ高さ恩恵生活の一ふしにはあらずや。

思ふに他力は神祕なる恩恵の雲に沖る高峰の如き乎。其の末廣がりに下降して地平に近づくや、そこには萬殊の生活の群然として繁茂し、飛鳴し、跳躍し、馳逐する自力の裾野の廣く遠く横はるを見るべし。自力の裾野の遠くして廣きほど、吾人は倍々他力恩寵の峰を打仰ぐと高し。古人曰はずや、我れは種^フゑアポロは漑^{みぎ}ぐ、長^まつるものは惟だ神也と。われらは神に長てられながら、尙ほ自ら種^{みぎ}ゑ自ら漑^{みぎ}ぐの自由を有てり、而してこれやがて神の恵みなるが故に、われ之れを神に感謝す。

(明治三十八年四月)

讀莊子

(莊子の解脱哲學)

吾人現代の要求を以て莊子の解脱哲學を讀む、彼れは將に無何有の郷に一笑を發すべし。莊子をして永へに莊子たらしめよ。吾人は吾人自らの見たる彼れが解脱觀の一斑を描き且つ評すべし。これ彼れの所謂各是に由^{しな}ふなり。斥鷃は鳥の小なるもの也。彼れ垂天の大翼を搏つて將さに南を圖らんとする鵬を嗤うて曰はく、彼れ且さに奚くに適かんとする、我れ騰躍して上ること數仞に過ぎず、而して下つて蓬蒿の間を翺翔す、此れ亦飛ぶの至りなり、而して

彼れ且さに奚くに適かんとすると。蓬蒿の間、尙ほ我が性を盡くし科を盈たすに足るべき適地あり、而かも是くのごときは惟り達者にして到り得る所、かの區々として小大の辯に拘はるものの知る所ならんや。斥鷃の鵬を笑ふや、若し其の小大辯中に踟躕するの見地よりしてならば、是れ身の程知らずの小知小言と謂ふべきのみ。小、大を笑はんか、大亦小を笑はん、かくして大の上に大を架し、小の下に小を横たへて、曼衍無端の辯、紛然として其の歸を見ざるべし。何が故ぞ。是れ畢竟相待界中に立つて大小を争へば也。大といひ小といふは、人爲の對名のみ。一たび相對を去つて絶對の觀に立たんか、小大一切の辯、蕩々として一如の海に入る。世の大いなるもの何處にかある、何物か能く其の

大を恃み其の久コトシを誇る。かの鵬や大なりと言ふと雖も、尙ほ雲と風とに待つ所あるなり、待つ所ある、是れなほ相待海中の一波のみ、眞の大にはあらざる也。かの八千歳の春秋を有する上古の大椿や、壽永しといふと雖も、是れなほ三祗の一瞬のみ、眞の永コトシにはあらざる也。一切待つあるの境を脱出トッして、始めて眞の大あり、眞の永あり。鵬と斥鷃と、螻蛄コトシと大椿と、其の大小長短を較する、また悲しからずや。笑ふべきは、世の所謂識者也。彼等は自ら内外の分を定め、榮辱の境を辨へたりと稱す。されど彼等の識見は、未だ全く世の是非名聞の境に抜く能はざる也。見よ、列子に至りては、風に御して冷然として行く、其の曠達の見、當さに一等の高さを推すべし。然れども彼れは未だ至らざる所あり。

彼れの行くや尙ほ風に待つ所あれば也。誰れをか眞に至れるものとなす。曰はく、至人也、神人也、聖人也。「至人は己れなし、神人は名なし、聖人は功なし」。彼等は一切待つ所なし。彼等は大小相待の境を超脱して、窅然無何有の絶對境に遊ぶ。彼等は天地の正に乗じて、六氣の辯に御し、以て無窮に遊ぶもの、悪んか待つ所あらんや。莊子之れを稱して逍遙遊の人といふ。

大いなるかな逍遙遊の人、逍遙遊の人は直ちに絶對と冥したるの人也。絶對と冥したる人は、即ち道を躰したるの人也。道とは何ぞや。莊子の解脱哲學を説かんには、一わたり彼れが所謂道の概念を明かにせざるべからず。道の意義明かにして、彼れの解脱趣味ふべく、併せて解脱を得た

至人無己
神人無名
聖人無功

る至人聖人の面目躍如たるべし。猶ほ法の何たるかを明かにして、悟の何たり、佛陀涅槃の何たるかを明らめ得べきにも喩ふべし。

莊子は道を以て其の發現の段階を異にするものと見たり。道は其の混沌未剖の源に溯るほど、渾然として完く、分化差別の流れ遠きほど、缺然として完ならずと見たり。されば言はずや、古の人其の知至る所あり、悪んか至る、以て未だ始めより物有らずとなすものあり、至れり盡くせり、以て加ふべからず、其の次は以て物ありとなす、而かも未だ始めより封對有らざる也、其の次は以て封對有りとなす、而かも未だ始めより是非有らざる也、是非の彰はるゝは道の虧くる所以也、道の虧くる所以は愛の成る所以也と。

愛憎是非の彰はるゝに至りて、道の澆漓極まる。最上至極の道は愛惡是非を絶し、更に對を絶し、更に物を絶す。是れ豈一切の思議言説を絶し、一切の名字心縁を離れたる超絶不可知の虚無にあらずや。これ略ぼ周子の所謂無極に當たるものと見るべし。この根本の道より岐かれ出でたるもの、即ち物也。未だ何物とも規定し、指示するを得ざる唯だ有りとのみ言ひ得べきもの、而かもそは既に有といひ物といふ點に於いて、本源より一步を差別待對の下方に開きたるもの、即ち少なくとも吾人の思想と交渉を有し、吾人の自覺對境となる一分の積極性を有せるものと見るべく、随つてそれだけ又道の完全相に於いて虧くる所あるものといふべし。こは宛も周子の所謂太極に當し、又老子の泚

成○列○子○の○太○易○混○淪○な○ど○に○當○す。更○に○こ○の○物○よ○り○一○段○下○りて、始めて萬個物にそれ〴〵の規定ある性質を賦する個性原理としての對あり。これは周子の所謂陰陽に當たるもの乎。この對待的原理よりして、更に是非を生じ、愛憎を生じ來たる。因りて惟ふに、莊子は形而上學上、一種の分出論者たるの面目を具ふ。道の分出は世態の汚下也、墮落也。墮落せるものは復歸せしめざるべからず。復歸は即ち解脱也。

莊子は是くの如くに道の發現の段階を觀たり。然れども彼れが解脱可能の根據として、主もに縦説横宣せる道は、全くの消極的虚無の道にはあらずして、一面旺盛なる積極的活動を有する實有なり。天地萬物の根本的活動原理と

して今に至るまで現に活潑に働きつゝある眞實の有也。説いて曰はく、夫れ道は情あり、信あり、爲すことなくして無形傳ふべくして受くべからず、得べくして見るべからず、自ら本とし、自ら根とす、未だ天地あらざる古へより以て固より存す、鬼を神とし、帝を神とし、天を生じ、地を生ず、太極の先に在つて高しとなさず、六極の下に在りて深しとなさず、天地に先きだち生じて久となさず、上古より長じて老となさずと。又曾て道を讚美して曰はく、吾が師乎、吾が師乎、萬物を齧して義となさず、澤萬世に及んで仁となさず、上古より長じて老となさず、天地を覆載し、衆形を刻彫して巧となさずと。因りて觀れば、莊子の所謂道は、最も信實なる有也、時空の待對を絶したる無形無相の絶對也、存在の原因を自ら

に有する自根自因也(スピノーザの所謂自因乎)、一切生々の根本たる造化的原理也而して又無始無終也。莊子は又分明に道の遍在性を認めたり。其の道は、螻蟻に在り、稊稗に在り、瓦壁に在り、屎溺に在りと言へるもの、以て微とすべし。更に其の、蓬と楹と、厲と西施と、恢恠憭怪とを擧げて、道は通じて一たりと言へるに參すれば、彼れは道の、佛に在りて増さず、衆生に在りて減ぜざる平等一如性をも認めたるもの、の如し。随つて彼れは又道の内在的なる所以をも説きたる節あり、其の言に曰はく、其の物(道)たるや、將らざるなき也、迎へざるなき也、毀らざるなき也、成さざるなき也、其の名を攫寧となす、攫寧とは攫りて後ちに成すものなりと。こゝに所謂攫寧は取りも直さず道が萬物を離れて超在せずし

て萬物の中に楔り寓して即ち内在して、而かも其の恒寧不變の一躰を保持せるを道へるものにあらずや。終りに莊子の道は又、一種の精神的、靈智的のものなること、ほゞ疑ひを容れざるに似たり。この點彼れが明説を缺けるに似たれど、而かも其の總じて道を説くとの老列二家に一步を進めて、一層純理、哲學的なるふし多きは否むべからず。殊に彼れが吾人の身躰を使役する無形の道の一片をば、眞君もしくは眞宰と名づけ、而してこの眞君もしくは眞宰は、身躰と共に漸滅せざると、猶ほ薪盡きて火燼さざるが如しと觀じたる一段の思想に稽ふれば、彼れが明かに一種の精神不滅論者たりしと共に、其の謂ふ道の精神的のものなると亦疑ふべからざる也。莊子の道は吾人をしてスピノーザの

本躰に想ひ到らしむ。莊子は形而上學上、スピノーザと共に精神的、一元凡神論者たるの位置を占めたるものなりと言ふ、非なる耶。

かくの如く、道は不變恒寧の一を性として、變化生々の多を徳とするもの也。偉いなるかな天地の道。天地の道を躰したるものは、是れ即ち天地の大性大徳を吾が有とせる也。さればかの達者を見よ、達者に我なく、耦なく、對なし。一切を玄同して、直ちに天地の一に入る。則ち充實の感湛然、會て天地と共に饑えず。仁義なく、巧智なく、是非を一途にし、不可を一條にし、生死を一如にして、心悠々、無逝の常存に遊ぶ。何をか無逝の常存といふ。曰はく、夫れ大塊我れを載するに形を以てし、我を勞するに生を以てし、我を佚

するに老を以てし、我を息するに死を以てす、故に吾が生を善くするものは乃ち死を善くする所以也、夫れ舟を壑に藏し、山を澤に藏して之れを固しと謂ふ、然り而して夜半有力者之れを負うて走る、味者知らざる也、小を大に藏する宜しき有るも猶は遯るゝ所あり、夫の天下を天下に藏して、遯るゝ所を得ざるが若き、是れ恒物の大情也、(中略) 故に聖人は將に物の遯るゝを得ざる所に遊んで皆存せんとすと。何等の大觀、何等の深語。莊子の言、沈洋自恣、呵哇なきが如くにして、而かも時に是くの如きの至觀あり。蓋し以爲へらく、世の生死を達觀せざる者は、猶ほかの舟を壑に藏し、山を澤に藏するが如き乎。かくて彼等は最早これにて堅固なり、大丈夫なりと思ふ。焉んぞ知らん、刻々移りくゝて休ま

ざる時劫てふ有力者の爲めに、其はいつしか負ひ去られて、跡をもとゞめざるに至るべきを。天地の間、何物か流轉せざる、何物か壞滅せざる、何物か遯れ去らざる。壞滅し、遯れ去るものの中に、我等が生死解脱の舟を藏して固しと思ふは誤らずや。然らば壞滅し且つ遯れ去らざるは何物ぞ。曰はく、天地之れのみ。天地より大なるものあらず、天地より恒寧なるものあらず、誰れか能く天地を負うて奔り去る、何物か能く天地の外に遯れ去る。故に我れを天地に展べ充たし、天地の心を以て我が心とするものは、是れ我が生命を天地てふ不壞金剛の大壑大澤に藏する者也、かくて達者は生を觀ぜず、死を觀ぜず、悠々として、無遯の常存に遊ぶと。然れども謂ふ所無遯の常存に遊ぶは、是れ唯だ道の一而

を得たるに過ぎず、即ち其の一を得たるなり。通を得たるなり。寂然不動を得たるなり。道は一なると共に多也。通なると共に殊也。寂然不動なると共に變化生々す。彼れは躰也。此れは用也。故に達者は能く一を操つて、變化の途に遊ぶ。對手かはれど主かはらず、一片の神行遇ふ所の千萬に酬酢して、執せず、滯らず、多々益と辯じて、惺々無礙なるもの。是れ達人の大自然にあらずや。譬ふれば、猶ほ水上の鷗の、或は雄波に高く、或は雌波に低く、或時は寒波に曝され、或時は暖波に漂ひ、或は明波に耀き、或は暗波に埋もれ、嵐に咽ひ、月に流れて、遇ふところの波の姿のさまざまに、心一つの羽搔き會て亂れず、いよく美しくしう、圓かに萬波自在の途に遊ぶが如き乎。達人の心は變化の中に活く。彼れは道樞を操

り、環中に居り、以て無窮の變化に應接す。應接する所限りなくして、心光益々圓かなり。故に曰はく、天地の正に乗じ、六氣の辯に御し、以て無窮に遊ぶと。莊子の解脫觀は、虛無死一の消極に偏せずして、活機縱横の態に富めり。是れ差別變化を排せずして、差別變化を御するの道を説けば也。

それ物の轉化變相オダルトンフォーレンに遊びて、心機流るゝ如きは、達者の一特質也。彼れが虚靈神游の力は、能く人となり、馬となり、男となり、女となり、鳥となり、魚となり、死となり、生となり、鼠肝となり、蟲臂となり、而して會て一芥帶をもとめず、是くの如くにして、彼れは能く受くる所の形を適として、會て自ら感はず、疑はず。是れ道のおのづからなる獨運に任せて、特に一形一相に執するところなきが故にあらずや。莊子以

爲へらく、特に人形じんぎを犯して喜ぶが如きは、未だ活潑なる天地の道に參ぜざるもの、人形の如きは萬化して未だ始めより極まりあらざる也。誰れか自ら人と生まれたるを喜び恃むものぞ。人と生まれたるは、吾人が偶々受け得たる天地の一形のみ。喜ぶに足らず、恃むに足らず、矜るに足らず。觀ずれば萬物萬形、皆我が一變相一變形メタモルフォーシスにあらざるや。昨の蝴蝶は今の莊周也。前身後身窮まりなく化々して、而かも道は當處に湛然たり。人たると鼠蟲たると、何れをか喜び、何れをか悲しまむ。今大治かね金を鑄るに、金もし踴躍して、我れ必ず饌鄒の名刀たらんと曰はば、大治は必ず之れを不祥の金とすべし。是くの如く、人もし必ず人と生まるゝを願ふの心勝らんか、造化必ず之れを不祥

の人となすべし。(陳べて此に到る、誰れかポーロが嗟、人よ、爾何人なれば神に言ひ逆らふや、造られし物は造化主に向つて爾何故に此く我をつくりしと云ふべけんや、陶人は同じ塊を以て一の器を貴く一の器を賤しく造るの權あるにあらざるや)の一言を想ひ出ださざる。生まれて人形に遇ふと遇はざると、其の命一に天地造化の心にある。さらば爾が有爲矜持の一念を去れ。「今一に天地を以て大鑑となし、造化を以て大治となす、悪んか往いて可ならざらん、成然として寝ね、遽然として覺むるのみ」と。

是くの如くに觀じて吾人の心に一種の悅樂あり。是れ即ち天樂也。曰はく、「吾師乎、吾師乎、萬物を整して戻もどとなさず、澤萬世に及んで仁となさず、上古より長じて壽となさず、

天地を覆載し、衆形を刻彫して巧となさず、此れ之れを天樂と謂ふ。故に曰はく、天樂を知るものは、其の生まるゝや天行、其の死するや物化、靜にして陰と徳を同じうし、動いて陽と波を同じうす、故に天樂を知るものは、天怨なく、人非なく、物累なく、鬼責なしと。語や、疎漫なりといへども、彼れが心を天地と共に擴充して、其處より不盡の法悦を挹まんとせるの意見るべき也。其の逍遙遊といひ、與物爲春といへる如き、亦皆この一味法悦のこゝろを句はせたる言葉にあらずや。

自恃自用の念を去れといひ、天地の大化に打任せよといひ、遇ふ所の萬形萬相に安んぜよといひ、はた天樂といひ、物と春を爲すといふ、凡そ是等の思想に參すれば、莊子は一種

の優に高尙けたかき宗教的歸依の感情を有したるが如くに思はれずや、其の口を極めて謙虛無心の要を言へるの心は、やがて佛者の所謂自然法爾の意識に通ひ、基督教の謙讓倚信の態度に酷肖す。さはれ、吾人は莊子の解脫意識の中に竟に宗教的敬虔の涙を見出だす能はざるなり。彼れは屢々吾人の無知孤弱を言へり。屢々造化の大徳を讚美せり、然れども彼れは曾て一たびも造化に對つて宗教的崇敬の熱情を瀧たぎしことあらざるなり。造化は彼れが偉大なる師也、未だ偉大なる神にはあらざりし也。かるが故に彼れの造化に對するや、宗教的に信じて仰げるにあらずして、哲學的に其の大徳大用を己れに躰得せんとせる也。彼れはみづから造化と同じ超人的大自在の地に遊び、造化の祕訣を褫

つて己が秘訣となさんとせる也。 温かなる大光攝護の力に打継るがごときは、彼れの解脱觀に見るべからず。 彼れは悟を知つて信を知らず、感應の聲、道交の響きは、寂寞として彼れの意識に聴くべからざる也。 彼れは白眼もて一切を視たり。 其の將さに逝かんとする病者に對つて、人をしめて偉なる哉造化、又將さに奚んか汝を以て爲さんとする、將に奚んか汝を以て適かんとする、汝を以て鼠肝と爲す乎、汝を以て蟲臂と爲す乎、といはしめたる一段の如き、以て其の哲學的無頓着觀をこそ見るべけれ、斷じて是れ敬虔の言とはいふ可らず。 彼れには嘲世魂ありて敬虔魂なし。 所詮彼れの解脱觀は、空靈也、超詣也、飄逸也、偉大也、而して又無何有の郷其のもの、の如くに冷靜也、寂寞也、疾痛惻怛抑へがた

き深き感情の要求をもて天地の有情者に打向かふが如き優婉無限の詩は曾て彼れの意識に煥發せざりし也。

莊子が解脱の方法及び段階を説くや、亦頗る佛者に似たる所あり。 彼れ説いて曰はく、(前略)三日にして後能く天下を外にす、已に天下を外にす、吾れ又之れを守る七日にして後能く物を外にす、已に物を外にす、而して吾れ又之れを守る九日にして後能く生を外にす、而して後能く朝徹す、朝徹して後能く見獨す、見獨して後能く古今無し、古今無くして後能く不死不生に入ると。 朝徹は所謂大悟徹底也、見獨は所謂見性也。 其の他古今無しといひ、不死不生に入るといふが如き、是れ皆吾人が且暮に佛家の悟意識中に遭逢する所ならずや。 夫れ見獨もしくは見性は解脱の三昧に入る

最も確實なる門也。見神見佛も亦是れ見獨見性を外にし
 てはある可らず。過去一切の諸佛は言ふに及ばず古へよ
 り悟達之士は皆一樣に申合はせたらん如く、この不門の一
 門を透過してこそ、一期の大事をも決定し、往生の素懷をも
 遂げたるなりけれ。見獨の二字こゝに下し得て極めて緊
 切極めて活潑、是くの如くして莊子の解脱觀は、極めて浮泛_石導
 ならざるを得たりといふべし。莊子は尙ほ解脱の妨_石及び其の
 救治法即ち一言すれば解脱病學
 と其の靜止法とを詳論したり、今は煩を避けて陳べず。

以上、吾人は莊子の解脱觀を描き來たりて、轉た其の浩々
 の調に打たれたり。觀じてこゝに至る、また人類の一光榮
 といふべし、人この境に立つて誰れか復た生死の巷に流轉
 すべしや。されど、吾人は莊子の解脱觀に對して、一種言ふ

べからざる寂寞を感ず。莊子の所謂道は、活潑なる造化的
 原理にして、蕭條空白の虚無的至上神にあらず、されど其は
 吾人が深き心の歎息_{なげき}と感應するの當躰にはあらざるなり。
 枯槁超邁彼れが如き人にして、方さに彼れが如きの道と解
 脱觀とあり、されど感情の要求に無限の意義及び價値を置
 かんとする現代の吾人は、竟にこゝに止まる能はざる也。
 莊子は豁然徹して獨を見るといふ。而かも其の謂ふ獨
 なるものは、一切を海の如くに呑み盡くして、理想の一閃光
 をだに點示せざる黒闇々の形而上的怪物にあらずや。莊
 子の解脱觀は、全く消極的に變化差別を否定し排除せずし
 て、むしろ其の去來のまゝに、應酬無礙なるべきを説けるの
 點に於いては、頗る活機に富みたるの觀ありと雖も、其の

謂變化に應ずるの道なるもの、詮ずる所、果てしなき因果の車を繰りかへして踏み去り踏み來たることにあらずや。人生の事、若し限りなき變化の車を唯だ滑かに、滯りなく、踏去踏來する外に出でずとすれば、あはれ何人か早く其の單調無意義に倦みて死を冀はざる。踏み去り踏み來たるが中にも、歩々向上の痕を讀み出で得べしと見てこそ、所謂變化に應ずるの事、始めて徒爲ならず、無意義ならざるを得るなれ。萬有の流れは價值の流也。一物として向上無限の天を望んで動かざるはあらず。吾人はこの萬有の流れに乗じて、一波と立ち一浪と崩るゝ中にも、不斷に卑きより高きに進む。この價值の流れに棹さずして、唯だ意味もなき變化去來の波と無窮に戯るゝを以て大自在の境となせる

莊子の解脱觀は、餘りに寂寥ならずや、枯槁ならずや。所詮莊子の大自在は、無人の大野を獨往獨來するの大自在也。彼れの所謂道は、プラト[○]ンのイデア[○](理想)の如くに一切の價值を統一して、其の各個に存在の意義あらしむる有極的原因にはあらざる也。吾人は到底向上なき變化の中に居るに堪へず。善いかな、荀子の評。曰はく、莊子は天に蔽はれて人を知らずと。げにや、彼れは全く人生を空視せり、彼れが解脱の國には、唯だ一個の大いなる道てふ形而上的怪物の永へに動けるありて、人生あらず、個人あらず、眞といひ善といひ美といふ價值の世界もあらず。蕩々たり、莫々たり、寂々たり、冥々たり、是れなほ我等が慕ふべき永劫の郷なる乎。さはいへど、莊子をして古今を獨歩せしめよ、彼れを

して永へに彼れたらしめよ、我等が現代の要求を以て律せんには、彼れは餘りに超空也、沒理想也、無端崖也（彼れが一面の矛盾的思想たる利己的發生論は今必ずしも窮めず）。彼れをして永へに彼れたらしめよ。かくして彼れは無何有の國に遊び、我等は神之國に遊びむ。

若しかゝる寂寞たる莊子の解脱觀の中にも、やゝ温かなる一異彩の拾ふべきものありとせば、其は彼れが理想的人格に對する景仰向慕の情なるべし。彼れが至人、神人もしくは聖人の徳を描くや、情あり、力あり、姿態あり。今其の一二の章を援かしめよ。曰はく、之人や、之徳や、將に萬物に磅礴して以て一世の爲めに亂治を駢めんとす、孰れか弊々焉々として天下を以て事と爲さんや、之人や物之れを傷るな

いたひ

し、大浸天に稽りて溺れず、大旱に金石流れ、土石焦れて熱せず、是れ其の塵垢糞穢も將に猶ほ堯舜を陶鑄せんとするもの也、孰れか背て物を以て事と爲さんや」と。曰はく、古の眞人は生を説ぶを知らず、死を惡むを知らず、其の出づるや欣ばず、其の入るや拒まず、脩然として往き、脩然として來たるのみ、其の始まる所を忘れず、其の終はる所を求めず、受けて之れを喜び、忘れて之れを復す、是れ之れを心を以て道を捐てず、人を以て天を助けずといふ、是れ之れを眞人と謂ふ、然るがごときは其の心忘る、其の容寂かに、其の頽頽やかなり、凄然として秋に似、暖然として春に似たり、喜怒四時に通じ、物と宜しきありて、其の極を知る莫しと。又曰はく、古への眞人、知者説くを得ず、美人濫するを得ず、盜人劫かすを得ず、

伏羲黃帝友とするを得ず、死生も亦大なり、而して己れに變なし、況んや爵祿をや、然るが如きは、其の神、大山を経て介するなく、淵泉に入りて滯はず、卑細に處りて憊れず、天地に充滿し、既に以て人に與へて己れ愈々有てりと。見るべし、莊子の理想的人格を描くや、神通的、奇蹟的、渣滓を著けたるふし、比較的、鮮なく、而して其の之れに對する、渴慕の態度の一種の光彩を放てる者あるを。莊子の道は、佛者の法也。莊子の至人、神人は、佛者の佛陀、覺者也。道あり法あれば、之れに體達せる神人、覺者あるべし、莊子の所謂、古之神人は、佛者の所謂、三世十方之諸佛乎。

謂ふ所神人は實有の人乎、はた空想の人乎、若し全く架設の空想見ならば、莊子の解脱哲學は其の根柢よりして崩れざるべからず。そはかくの如き神人的人格を成就することとを外にして、莊子の解脱觀は成り立たざれば也。解脱とは何ぞ。畢竟、道に體達せる如是神人となるの謂ひならずや。少なくともかゝる神人は、在り得べき理想的人格ならざるべからず。神人の實在は、解脱可能の擔保也。されば杳かなる藐姑耶の山の神人の高姿は、幻の如く、莊子の心を動かし來たりて、無限の神往に堪へざらしめたりけむ。神人を實存すと曰はば、莊子は、哄然一笑すべし。神人を實存せずと曰はば、彼れが渴慕の要求は、其の嚮ふ所を失ふべし。こゝに支牾矛盾あり、而して又支牾矛盾以上の暗示あり、默證あらざる乎。豈莊子は、思議言説を絶したる超絶神としての道を説くに足れりとせずして、活潑なる造化神として

の道を説き、更に造化神としての道を説くに足れりとせずして、道に躰達せる如是神人の實在を説き出でたるにあらざらんや。これ或は彼れが自覺の底なる深要求なるなからんや。かくして彼れの解脱觀に、一脉優なる人格の香氣かきあり。

あはれ、この一種の人格的思想こそは、無何有の海の如く大いにして寂寞たる莊子の解脱觀に、一點の青螺を點ずるものにあらずや。而かもこの一點の青螺だに、彼れが千里横絶の大空蕩の潮風に、屢々其の影を見失はんとする也。

（明治三十八年五月）

驚異と宗教

古人は驚異の念を以て哲學研究の始めなりと道破したりしが、これは獨り哲學に於いて然るのみにあらず、宗教に於いて特に然り。否、驚異の感情は、宗教的意識の初、中、終を一貫して、其の不易の要素をなすといふも不可ならず。古より、個人に於いても團體に於いても、宗教的信念の、新鮮活潑を失うて、抑塞し、澹滯し、固結するとあるや、そこには必ず驚異の感情の、涸渴し、闕如せるあるを見るなり。吾人の宗教的信念をして、常に火の如く燃え、水の如く流れて息まざらしむるものは、この驚異の情が一分其の有力なる原因をなすが故にあらずや。驚異の感情は、直ちに天地の奥なる

永劫の神火を搥み來たりて、吾等が信仰の樹根に澍ぐ。悟達の士の信念の底には、常に一種の調べ高き驚異の情の流るゝあり、以て能く其の大をなし、新をなし、充實をなすなり。若しそれ悟前について言はんか、一たび驚き、二たび驚き、三たび驚き、四たび五たび驚き、くくして已まざれば、如何なる鈍根の機といふとも、尙ほ且つ豁然として徹すべし。驚異の感情の高潮する所、凡夫をして覺者たらしむ。曾て或法話類の書を讀みたる中に、眼に一丁字なき一農夫が、能く其の鈍根に打ち克ちて、見性の大事を做し遂げたることを記したる一節あり。其の意に云はく、禪僧農夫に打向かひ問うて曰はく、「汝は何時いつ生まれたるか、農夫直ちに應へて曰はく、「如來と同時に生まれたり、曰はく、「汝は當年何歳なるか、曰

はく、「如來と同歳なり、是に於いて禪僧また問ふに如來は何處に居るかを以てせしに、彼れ直ちに手を動かして、此處に應へたりければ、禪僧も感に入りて、其の證悟の透徹なるを允したり、云々と。思ふに、此くの如きは、往々實際にあり得べき事例にして、別に奇とするに足らざるべし。但だ吾人をしてこゝに深省を發せしむべき一事は、此くの如き無學無識の一凡人をして、一朝徹底して此くの如き宗教的天才たらしめたるものは何ぞといふとなり。而して是れ唯だく彼れが、人類通有の深根の、天賦たる驚異の感情を活潑に働かして、其の科を盈たしたるが故と見るべきにあらずや。彼れ豈一たび遽然として自己に對する驚異の情に打たるゝ所あるや、之れを再びして棄てず、三たびして放た

ず、竟に驚き驚きて如是崇高なる三昧地に達し得たるものならざらんや。宗教の事その眞諦に立ち入らば、復た知識學問と何の關りなきこと是れにて知るべし。げにや凡夫も亦皆生まれながらにして如來の知慧徳相を具へたり。而してこの隠れたる深き寶珠を掘り出だす有力なる器ありとせば、そはやがて驚異の一念にあらざる乎。超絶の驚異ありて徹底し、絶超の驚異ありて見性し、絶超の驚異ありて歎美景仰し、超絶の驚異ありて歸依信樂す。カ・ライルなどが、屢々驚異を宗教の基礎根本なる如くに道説せるは、人類不拔の實驗に基づける眞理として、吾人の想起せざるを得ざる所なり。

尙ほ記す、予の幼かりし折、路邊の磊々たる岩石を打眺め

て、屢々一種の埒なき默想に耽りたるをありしを。かゝりけるをりは、いつも手もて其の石を押し動かし、或は其の硬さかどくしき面に觸りなどして、何心なく半ばは衝動的に、其の石の實在性を確め、さて後ちにかゝる物の無窮に天地の間に在るの不可思議に撞著して、予共心の解くよしもなき不可言の驚異に充たさるゝを常としたりき。今より憶へば、この心これ幼穉ながらに存在の驚異を経験せるの心なりけるなり。われに取りては物の在りてふことは、一種無限の寂寞と不安とを含める驚異の太源たりし也。(こは思ふに「存在」の自性または實相の何たるかが一切不明なりしに因れるなり。)存在は天地の第一事實也。予はこの第一事實に對して、無限の驚異を感じたるなり。而してこ

の幼かりし驚異の感情は、後年予が明瞭なる自覺を以て宗教的生活に入らんとする所謂新生活の首途かどてに於いて、復び深奥幽玄なる形を以て激烈に襲來せり。爾時予をして一面に混迷、懷疑、不安、恐怖、孤寂、闇黒の大海に漂はしめたるものも、亦實にこの驚異の感情なりける也。この驚異は、今は打勝たれたる姿ながらに尙ほ一種の形にて予が心の奥深く流れつゝあり、この後も亦思ふにまかあるべし。驚異なき所、宗教は其の活生命を失ふべし。

基督が心の清きもの、貧しきもの、空しきもの、單純なるもの、謙遜なるものを以て、最も宗教的祝福を享くるに堪へたりとなせるの意義を稽ふるに、是れ一つは、少なくとも此くの如き者のみ、能く偉大なるものに驚異し、崇高なるものを

歎美し、善美なるものを渴仰することを能くするが故にあらずや。心の清きものは、己が心の鏡を打開いて、如實に天地の高大と美妙とを寫し出づるが故に、こゝには新鮮なる驚異の一念、絶えず岩間の水とも湧きぬべく、而してやがて其の念ひの溢れに溢れて、超絶無限の相を著け來たるや、彼れ遽然として見性見神の人となる。世に嬰兒をさなごほど心空しきものはあらず、而して又嬰兒ほど驚異の念の新鮮なるものはあらず。人あり、若しこの嬰兒の如き新鮮なる驚異の情を有して、更に之れを博厚、深邃、豊富ならしめんか、彼れは一草一木を見て、直ちに實在の祕奥に見徹すべし。かるが故に、驚異は偽善と容れず、驕慢と容れず、頑梗と容れず、成心と容れず、傳説と容れず、有形無形の一切の偶像と容れず、而

して又形式儀文と容れず。基督限りなき感謝の念に溢れて天を仰ぎて曰はく、天地の主なる父よ、此の事を智者と達者との隠して赤子に顯したまふを謝すと。彼れは赤子の如き空しさ心を有しき、随つて其の心一種の純粹博大なる驚異歎美の情調をもて常に充ち溢てりき。

何事をも心得顔に立振舞ふもの多きは、いつの世にも見る常相なり。彼等の國には新たなるもの、珍らしきもの、驚異すべきもの、一もあるなし。支那の古賢人は喟然として歎じて曰はく、五情の好悪は古猶ほ今の如きなり、四躰の安危は古猶ほ今の如きなり、世事の苦樂は古猶ほ今の如きなり、變易治亂は古猶ほ今の如きなり、既に之れを聞きたり、既に之れを見たり、既に之れを更へたり、百年猶ほ其の多きを

厭ふ、況んや久生の苦をや」と。世の一切に新たなる者あるなし、驚異すべきものあるなし。人生の花は褪せ、歴史の幹は朽ちたり。因襲制度の枯葉病葉徒らに堆うして、人は永へに其の中に老いんとす。而して彼等は人生本來此くの如きものぞと心得ざるからさぞと、萬づ事もなげに言ひ去る也。彼等は一たび驚きて再びせず、再たび驚きて三たびせず、彼等の驚異は僅かに事相一膜の上を走りて已むなり。超絶無限の驚きは、彼等の曾て知らざる所。否、彼等はむしろ一切驚かざるを以て其の信條となすなり。以爲へらく、眠食し、勞逸し、冠婚し、葬祭す、人生竟に何の奇ぞ。雲行き、雨施し、春發き、秋脱つ、天地竟に何の不可思議ぞと。彼等は、瞳々としてとこめづらしくさしのぼる曙の大光を仰ぎても、

曾て眼を拭ひしとあらざるなり、彼等は、春の野川の水に優さしき思ひを宿せる夕星^{ゆまづ}見ても、曾て心動きしとあらざる也。彼等の花に神祕の匂ひなく、彼等の月に寂照の光なし。彼等の「自己」は、曾て一たびも其の自覺自觀の對境たりしとあらざる也。彼等の國の眞善美は名徒らにいかめしうして、曾て一たびも彼等が心靈の扉^{とびら}を啓きしとあらざる也。彼等は人生の寂寞を知らず、人生の大哀を知らず、人生の大歡喜を知らず、彼等は世の所謂一切價値を倒錯^{たうさく}觀するを知らず、隨つて竟に眞實^{まこと}を知らず、彼等が人生の舟に載せたるものは活きたる自覺にあらずして、死にたる夢也。彼等は死夢を載せていづこよりか來たり、死夢を載せていづこにか逝く。嗚呼、彼等は永へに若く、清く、新たなるべき心靈

の眼を天地人生に對して閉ぢたり、哀しむべし、彼等は視ても見ず、聞きても聽かざる「閔明閔聰」の人となれるなり。天上の星に無聲の樂音を聞き、野邊の草花に王者猶ほ及ばざるの榮華を驚きたる曇りなき心のまらば、あはれ一たびも彼等の胸に宿りしとはあらず、而して以爲へらく、天地人生は是くの如きものなり、一の奇なく、一の新なく、一の驚異なしと。嗚呼、何物か彼等の明を塞ぎ、聰^{さとし}を闕^{とぎ}きたる。文明也、祖師也、習慣也、傳説也、制度也、其他一切の偶像權威也。吾人は知らず識らずして、この積重の威ある機關の絲に操らるゝ木人たらんとす。いと淺まし、いと恐ろし。吾人は屢々勇敢なる態度を取つて、此等一切の成心、偶像、權威の外に超脱し、赤子天真の心に立ち還りて、天地人生に打對はざ

るべからず。是くの如くして始めて吾人に驚異あり、宗教あり。「智を得んが爲めに吾人は書を読むを要せず、書籍の数は限りなく、而して其は唯だ吾人を果てしなき虚榮に導くに過ぎず、寧ろ凡ての人をしてアダムの如く唯だ獨り世界にありと想像せしめ、而して唯だ世界を世界そのものの相に於いて觀ぜしめよ」とは、是れ神祕哲學者ニコラス、クザクィヌスの吾人に警告せる所ならずや。

天地は驚くべし、天地に驚く我は更に驚くべし。而して我に驚く我は更に又驚くべし。かくて吾人が我に驚く深さに際限あるべからず。人もし此の驚くべき我に其の一念を鐘鐘めんか、其處に一切の祕義を包める無量の法音の沈々として横に天地に亘り、縦に人生を貫くを聴取すべし。

げにや、そは「天淵也、靈臺也、祕府也、否、生命と光明との大海也。吾人もしこの「我」てふ大海の岸邊に立つて、其の限りなき驚異の眼を開かんか、道は最早吾人を去ること遠からじ。「邇く汝の口にあり、汝の心にあり」。唯だ他くまでも問ふことを要す、「我」とは何ぞやと。一切萬法を一念の上に構へ出だす底の大産出力を有するの「我」、眞善美の理想を自ら掲げ出だして之れを實にしゆくの「我」、文明を造り、歴史を編み出だすの「我」、無限に向上自強して永遠に足ることを知らざるの「我」、一切現實の經驗を以てして尙ほ且つ填むるに足らざる超自然の要求を有するの「我」、如何なる靈魂の傷手いたでをも自ら醫し得るの確信を有すると共に、心情の深き惱みと傷みに泣く「我」、天上天下獨尊の自覺を有すると共に、賤あはしき

垣根の草花にも見ぬ世の縁まきしの夢かと迎らるゝ思ひする
「我、そもく如是我は何物ぞと。一たび是くの如く眞面目
に我に面接するに及んで、誰れか限りなき驚異の一念に打
たれざるべき。この時退轉せず、不斷に一念の氣合を弛べ
ず、進み進んで滿を引くの弓の如くすべし。やがて機熟し
ぬれば、件の一念驚異の弓は、心弦強く彈じ去つて、鏗然とし
てあやまたず實在まじの的に稀有の法音を撞き出づべし。驚
くべきかな、今の我は最早昨の我にあらず、咄々、我、神乎、神、我
乎。我、神に躋れるなり、神、我に格かたれる也。現實と超自然と、
我と神と相抱きぬ、相觸れぬ、相照らしぬ、相道交しぬ。神を
見たるなり、神の聲を聴きたるなり、神の子たるを證したる
なり、神の愛に分け入りたるなり。不可思議なるかな、現實

は「超絶」となりぬ。すべてこの刹那の意識、筆にも言葉にも
盡くされず。この自覺、これ自然界の意匠より讀み到りた
るにもあらず、因果の關係より溯りたるにもあらず、完全て
ふ觀念よりして實在そのものを演繹し出だしたるにもあ
らず、道徳上の要求より迫り出だしたるにもあらず、釋迦の
意識を摹倣し、基督の信仰に依傍して得たるにもあらず。
顧みれば、唯だこれ、我れが我れみづか自らに對する一念やみがた
き驚異の念の獨立に産み出だしたる偉大なる事實にはあ
らずや。そは直識也、直覺也、自證也、面接也、見よ、「こゝにこゝ
に」と叫ばざるを得ざる端的の事實也。このをり、一種寂寥
の意識の中に、大歡喜の情、ひた湧きに湧くべし。嗚呼われ、
事を舖張して説かず、わが自ら經たりし稀有微妙の心證に

基づきて、自ら揣らず世に向かつて道説する也。人よ聴け、是くの如くにして吾人は神を見、是くの如くにして吾人は一期の大事を成し遂げ得る也。感謝せよ、一切人生の祕義を啓くべき唯一の鑰は、かくて吾人手中の者とはなりけるなり。

宋儒の談理勃率を以てして、尙ほ且つ人心の靈明に驚き驚くや、一念の誠敬を不斷の燈ともしびとして其の聖壇に献げたり。敬の一字は、宋儒爲學の根本の工夫及び精神にして、又實に一種の宗教的情調の宿る所にあらずや。唯だ彼等が自己を通じて見たりし神の、竟に天理といふが如き抽象神にして具象神たらざりしは、其の根本の排情觀之れをして然らしめたる也。

所謂驚異の情は、悟前と悟後とに於いて、其の内容に多少の差あるべく、殊に悟後に於いて其が寧ろ歎美感謝の情もて織りなさるゝの多き、これはた否むべからざる事實なるべしといへども、兎も角もこの一念が偉大なる宗教的生活の一貫の根調をなして、常に其の新鮮なる活動の源泉たるは看過すべからず。未だ悟らざるものは悟らんが爲めに偉大なる驚異あるを要し、既に悟れるものは悟後の生活に常に光輝充實あらせんが爲めに深奥なる驚異あるを要す。驚異せよ、眞面目に驚異せよ、超絶的に驚異せよ。驚異は宗教の母也。

(明治三十八年五月)

予が見神の實驗

この篇は世の宗教的經驗深き人に示さん爲めにはあらずして
唯だ心海に神を求めて宗教的生活に入らんとする世の多くの
友に薦めんとて也。

予は今予みづからの見神の實驗につきて語る所あらむ
とす。この事予に於いては多少心苦しからざるに非ず。
されど予は今世の常の自慮や心配ふしひを一切打遣うすてて、出
るだけ忠實に、明確に、予が見たる所を語らては已み難き一
つの使命を有するを感ず。あながちに己が見證を將て世
に吹聴せんとはあらず、唯だ吾が鈍根劣機を以てして、尙
ほ且つこの稀有の心證に與るとを得たる嬉しさ、忝けなさ
の抑へあへざると、且つは世の心海に神に憬れて未だその

聲を聴かざるもの、人知れず心の惱みに泣くもの、迷へるも
の、煩へるもの、一言すればすべて人生問題に蹉き傷きて慘
痛の涙を味へるもの、凡そ是等一味の友にわが見得せる所
を如實まことに分ち傳へんが爲めに語らんとはするなり。あ
はれ、上天も見そなはせ、予は今この一個の貴き音づれを世
に宣べんが爲めに此處に立てり。

わが見證をさながらに世に傳へんといふ。事やもと至
難なり。嗚呼吾れ一たび神を見てしより、おふけなくも此
の一大事因縁を世に宣べ傳へんと願ふ心のみ、日ごとに強
くなりゆきて、而かも如何にして之れを宣べ傳ふべきかの
手段に至りては、放焉として闕けたり。如何にしてこの目
的を達すべき。顧みれば、わが見證の意識の、超絶駭絶にし

て幽玄深奥なる、到底思議言説の以て加ふべきものなからむとす。人の世の言葉や、思想は、其の神祕的、具象的事相の萬一をだに彷彿せしめがたき概あるにあらずや。吾れ之れを思うて、幾たびか躊躇し、幾たびか沮喪せり。而して今にして知りぬ、古人が自家見證につきて語る所の、毎々徒らに人をして五里霧中に彷徨せしむるの感ある所以を。彼等が心血を瀝盡して其の見證の内容を説くや、時に發して煌々たる日星の大文章をなすとあれど、而かも其の辭愈々繁くして、指す方のいよく、天上の月を離るゝが如き觀あるは如何にぞや。彼等が悟を説くや、到底城見物の案内者が、人を導きて城の外濠内濠をのみ果てしなく廻り廻りて、竟に其の本丸に到らずして已める趣きあるなり。古人に

して然り、今所證の淺き予にして悟を説かんとす、説く所或は其の一膜を剝ぎ、更に其の一膜を剝ぎ、かくして永久竟に人をして其の核心に達せざらしめんとを虞る。されば、予は竟にこの一事を抛たざるべからざる乎。否、否。神はわが枯稿の殘生に意味あらせんとて、特にこの所證を手に附與したまへるにあらずや。この所證を幾分にても世に宣傳ふるは、吾が貴き一分の使命の存する所にあらずや。げにや、悟といひ見證といふもの、所詮は言説の傳へ得べき限りにあらざるべし。若かはあれど、わが満心の自覺を一揮直抒の筆に附して、尙ほ能く其の駭絶の意識の、騷然たる光の穗末をだに傳へ得ざる乎、その微かなる香氣をだにほのめかし得ざる乎。能と不能とすべて神にあり。吾れは

唯、自ら見得せる所を如實に語り出づべきのみ。神の現前若しは内住、若しは自我の高擧、光耀等の意識につきては、事に觸れ境に接して、予がこれまで屢々躬ら經たる所なりしが、而かもその不磨の記憶となりて永く後ちに殘る程の爽々たる觸發の場合は、幾んどあらざりし也。その是れありしは、昨三十七年の夏以後の事なり。今後は知らず、昨一年は予の宗教的生活史に於ける、謂はば、光耀時代、啓示時代なりきとも見るべく、予は實に昨一年間に於いて、不思議にも三たびまでもこれまでに經驗したるとなき稍々手答へある一種稀有の光明に接したるなり。而して其の最後のものを以て最も驚絶駭絶とす。

最初の經驗は昨年七月某日の夜半(日附を忘れたり)に於

いて起こりぬ。予は病に餘儀なくせられて、毎夜半凡そ一時間がほど、床上に粘坐する慣ひなりき。その夜もいつもの頃目覺めて床上に兀坐しぬ。四壁沈々澄み徹りたる晝夜の空の如く、わが心一念の翳を著けず、沓えに沓えたり。爾時、優に朧なる謂はば、歸依の酔ひ心地ともいふべき歡喜ひそかに心の奥に溢れ出でて、やがて徐ろに全意識を領したり。この玲瓏として充實せる一種の意識、この現世の歡喜と倫を絶したる靜かに淋しく而かも孤獨ならざる無類の歡喜は、凡そ十五分時がほども打續きたりと思ほしきころ、ほのかに消えたり。(本書一七九頁、宗教上の光耀と題する一篇のうちに、感情的光耀につきて記したる一節は、この折の經驗に基づきて物したるなり。予は從來とても多

少これに類したる經驗を有せざりしにはあらざりしが、此の夜のに於けるが如く純粹にして充實せるは無かりき。予は未だありしこの夜の經驗の深きころを測りつくし、迎り盡くすこと能はず。今なほ折々當夜の心狀を臚るに想起しては、天上生活の面影をまばし地上に偲ぶの感あるなり。

今一つは昨年九月末の出來事に繋れり。予は久しぶりにて、わが家より程遠からぬ湯屋に物せんとて家人に扶けられて門を出てたり。折りしも、霽れ渡りたる秋空の下町はづれなる林巒遠く夕陽を帯びたり。予はこの景色を打眺めて何となく心躍りけるが、この刹那忽然として、吾れは天地の神と偕に、同時に、この森然たる眼前の景を觀たりて

ふ一種の意識に打たれたり。唯だこの一刹那の意識、而かも自ら顧みるに、其は決して空華幻影の類ひにあらず。鏗然として理智を絶したる新啓示として直覺せられたるなり。予は今尚ほ其の折を回想して、吾れ神と與に觀たりて、ふその刹那の意識を批評し去る能はず。

終はりに語らんとするもの、是れ曩に驚絶駭絶の經驗と言ひたるものにして、これまで予が神の現前につきて經驗せるものうち、かくばかり新鮮、赫奕、銳利、沈痛なるは、あらずと思はるゝ程なり。予は今なほ之れを心上に反覆再現し得ると共に、倍々其の超越的偉大に驚き、倍々其の不測の眞理なるを確めつゝあり。左に掲ぐるは、當時の光景を略叙してさる友に書き送れる書翰の大意なり。

予が見神の

鏡から棒に候へども、いつぞや御話しいたし候ひし小生あの夜の實驗以來、驚きと喜びとの餘勢、一種のインスピレーションやうのもの存続いたし候て、躰にも多少の影響なきを得ず候ひき。

彼の事ありてこのかた、神に對する愛慕一しほ強く相成申候。如何にすればこの自覺を他に傳へ得べき乎とは、この頃の唯一問題にて候也。一面にはこの自覺人に知られたしとの要求有之候へど、他の一面には、更に眞面目に、嚴肅に、世の未だこの自覺に達せず又は達せんとして、惱みつゝある多くの友に對する同情を催起いたし居候。この事によりて、小生幾分か、釋迦の大悲や、基督の大愛を味ひ得たる感有之候也。

本年のうち小生はこれと併せて三たびほど觸發の機會を得申候。他の二つの場合前に陳べたるものを斥すも今憶ひ出だし候てだに心跳りせらるゝ一種の光明慰藉に候へども、先日御話しいたしし實驗は、最も神祕的にして亦最も明瞭に、インテンスのものに候ひき。君よ、この特絶無類とも申すべき一種の自覺の意をば誰れと與にか語り候ふべき。げに彼の夜は物靜かなる夜にて候ひき。一燈の下、小生は筆を取りて何事をか物し候ひし折のことなり、如何なる心の機にか候ひけむ、唯だ忽然は、つと思ふやがて今までの我が我ならぬ我と相成、筆の動くそのまゝ、墨の紙上に聲するそのまゝ、すべて一と超絶的不思議となつて眼前に耀き申

候。この間僅かに何分時といふ程に過ぎずと覺ゆれど、而かもこの短時間に於ける謂はば無限の深き寂しさの底ひより堂々と現前せる大いなる靈的活物とは、たと行き會ひたるやうの一種の Shocking 錯愕驚喜の意識は、到底筆舌の盡くし得る所にあらず候。唯だ兄の直覺に訴へて御推察を乞ふの外之れなく、今はその萬一をだに彷彿する能はず候。

兄よ、如何にか思ひ給ふ、小生の如き一面随分批評的、學究的精神をもてるものに、このやうな東洋的、中世紀的とも申すべき神祕的實驗あるべしとは、如何にもあり得まじき不思議事と思ひ給はずや。小生自身にも、其の後兩三日の間は、何だか狐にでもつまゝれたるや

うの心地いたし候ひしが、程たつに従ひ、件の自覺は益々明瞭確實と相成、其の驚絶の事實は、不壞金剛の眞理となつて光明を放ち來たり申候。今日は最早一點動かすべからざる疑ふべからざる心靈上の事實となり、力と相成申候。(下略)

これ實に昨十一月の某夜、十一時頃に起こりたる出來事なりとす。予はこの實驗につきては、最早言ふ所なかるべし、そは如何なる妙文辭を備ひ來たるとも、最早こゝに書き記したるより以上の事を説き明かし得べくも思はれざれば也。眞理は簡明也。眞理をして眞理自らを語らしめよ。言詮の繁重は眞理の累也。

さはれ予は件の見神の意識につきて、今一つの言説すべ

き者あるを感じたり。そは他にもあらず、予が曩に「我が我ならぬ我となりたり」といひ、靈的活物とはたと行き會ひたり」と言へるが如き言葉の、尙ほや、疎雜ル、ズの用法ならざる乎との疑ひ、讀者にあらんかとも思ひたれば也。されば、予をして今一度最も嚴密に件の意識を言ひ表はさしむれば、今まで現實の我れとして筆執りつゝありし我れが、はつと思ふ刹那に忽ち天地の奥なる實在と化りたるの意識、我は没して神みづからが現に筆を執りつゝありと感じたる意識とも言ふべき歟。これ予が超絶驚絶駭絶の事實として意識したる刹那の最も嚴密なる表現也。予は今、これ以上、又以外にこの刹那に於ける見證の意識を描くの法を知らざる也。予は如是に神を見たり、如是に神に會へり。否、見た

りといひ會へりといふの言葉は、なほ皮相的、外面的にして、迎もこの刹那の意識を描盡するに足らず、其は神我の融會也、合一也、其の刹那に於いて予みづからは幾んど神の實在に融け合ひたるなり。我即神となりたる也。感謝す、予はこの驚絶駭絶の意識をば、直接に、端的に、神より得たり、一毫一絲だに前人の證權を媒とし、若しくは其の意識に依傍したる所あらざる也。(彼等が間接なる感化は言はず。)

顧みるに、予が従前の宗教的信仰といふもの、自得自證より來たれるは少なく、基督其の他の先覺の人格を信じ、若しくは彼等が偉大なる意識を證權として、其れに依り傍らで、幼げに形づくりたる者、その多きに居りし也。半ばは他の聲に和し、他の意識を襲うて、神をも見たりと感じ、神の愛をも

知りぬと許したりし也。即ち間接に他より動かさるゝ所、其の多きに居りし也。後深く内部生活に沈潜するに及びては、一切前人の證權を抛ち去つて、自ら獨立にわが至情の要求に神の聲を聴かむとしぬ。わが要めは空しからず、予はわが深き至情の宮居にわが神在しぬと感じて幾たびか其の光明に心跳りけむ。吾が見たる神は、最早向きの因襲的偶像、又は抽象的理想にはあらざりし也。されどかく端的に見たりと感じたりしわが神の、尙ほ一重の薄紗を隔てたる如き感はあらざりし乎、水に映りし花の朧ろのこゝろを著けざりし乎。予は過去の幼稚なる朧げなる經驗をば一切虚也、誤也、又は無意義なりとするものにあらず。予は過去一切の經驗を貴ぶ。それら皆其の折の機根相應に神

を見たる眞實無妄の經驗として、わが宗教生活史の一箇一環をなす者にあらずや。謝せよ、これ皆上天の賜也。但だ、予は從來の一切の經驗を以て、わが不動の信念の礎とせんには、尙ほ未かすがに一點の虧隙あるを感ぜざるを得ざりし也。予が從來の見神の經驗なるもの、謂はば、春の夜のあやなき闇に、いづことしもなき一脈の梅が香を辿り得たるにも譬へつべし。たしかにそれと著るけれど、なほほのかに微かなりき。而して今や然らず。わが天地の神は、白日々々、驚心駭魄の事實として直下當面に現前しぬ。何等の祝福ぞ、末代下根の我等にして、この稀有微妙の心證を成じて、無量の法の喜びに與るを得べしとは。

夫れ見と信と行とは、吾人の宗教生活に於ける三大要義

也。三者は相濟し相資けて、其の價値に軒輊すべき所あるを見ず。たゞ予は、予みづからの所證に基づきて見の一義に從來慣視以上の重要義を附せんとす。人動もすれば見と信とを對せしめては、信の一義に宗教上千鈞の重きを措くを常とし、而して見の一義に至りては之れを説くもの稀也。況んや其の光輝ある意義を推揮するものに於いてをや。されど、予は信ず、偉大なる信念の根柢には、常に偉大なる見神あるとを。眞に神を見ずして眞に神を信ずるものはあらず。基督の信は、常に裏に神を見神の聲を聽けるより來たり、ポーロの信は、其のダマスコ途上驚絶の天光に接したるより湧き出でたり。菩提樹下の見證や、ハルラ山洞の光や、今一々煩はしく舉證せざるも、眞の見神の偉大なる信

念の根柢たり、又根柢たるべきは丁々火よりも燎かなり見なき信は盲信となり、頑信となり、他律信となり、外堅さが如くして内自ら恃む所なきの感を生ずべし。我等が神を信ずと言ひて、尙ほ自ら顧みて、どことなく其の信念の充實せざるを感ずるとあるは、是れ尙ほ未だ面相接して神を見ざるが故にあらずや。見ずして信ずるものは幸なり、信仰は未だ見ざる所を望んで疑はずなどいふ古言もあるとなれど、是れ未だ眞理の兩端を盡くしたるものとは言ふべからず。見ざる所を信ずる信をして信たらしむるもの、是れ即て既に幾分か見たる所の或物を根柢とせるが故に非ずや。勿論詮議を嚴にしていはば、見は竟に信に歸著すべし。信の尖銳照著なるもの、即て見なりともいふべし。されど、

こゝには唯だ普通謂ふ所の信の一義を取つて言説せるなり。されば予は將さに曰ふべし、見ずして信ずるものは幸也、されど見て信ずるものは更に幸也と。而してこゝに謂ふ見るの義がかの基督の一弟子が手もて再生の基督の肉身に觸れて、さて始めて彼れを見たりとせるが如き官覺的淺薄の意味ならざるや、論なき也。夫れ眞に神を見て信ずるものの信念は、宇宙の中心より挺出して三世十方を蔽ふ人生の大樹なる乎。生命の枝葉永遠に繁り榮えて、劫火も之れを燬く能はず、劫風も之れを僵す能はず。

予は予が見神の實驗の、或は無根據なる迷信ならざるかを疑ひて、この事ありし後、屢々之れを理性の法庭に訴へて、其の嚴正不假借なる批評を求めたり。而して予は理性が

之れに對して究竟の是認以外に何等の言をも挿む能はざるを見たり。予は又この實驗の、予がその折の腦細胞の偶然なる空華ならざりしかをも危ぶみて、虚心屢々之れを心上に再現して、前より後ろより、上下左右、洩らす所なく其の本體を正視透視したり、而して其の事實の、竟に巋然として宇宙の根柢より來たれるを確めたり。されど、予は尙ほこの實驗の事實が、萬が一にも誇大自ら欺きしものにあらざるかを慮れて、其の後も幾度となく之れを憶起再現し、務めて第三者の平心を持って、仔細に點檢したりしが、而かも之れを憶ひいづる毎に、予は倍々其の驚くべき事實なるを見るのみ。そは到底如實には言ひ表はしがたき稀有無類の意識也。今やいよ／＼一點の疑をも容れがたき眞事實と